

## 自然言語の現象論

### ——言葉はどれほど自ら語るか？

長 尾 史 郎

#### I 序 論

##### I-1 はじめに

以下で展開しようとすることは、ある意味で気恥ずかしいほど単純かつ自明に思われることがある。にも関わらず、それについて論じなければならな  
いと感じるのは、言語学プロパーの問題としてでなく、実際に（マイケル・  
ポラニーに言わせれば「暗黙に」）言葉が使われるときには——特に研究活  
動を念頭に置いているが——、それらの自明のはずのことが、いとも容易に  
違反されるのを見るからだ。だから、それを白日の下に曝すために、一度そ  
の自明のことを明示して見ようと試みた次第である。

##### I-2 「言語ヴェール説」<sup>1)</sup>対「唯言語論」

人は言葉を使って何らかの対象を記述する。問題になるのは対象の性質で  
あって、言葉はそのための（不可避の、あるいは必要悪の？）手段である。

目的論（ないし行為論）からすれば、以上のように、発話の目的は対象記  
述（話し言葉も含み、書記に限らない——以下同様）ないし発話者の意図の  
表明ということになろう。ここで、後者——発話者の意図の表明——につい  
ては、結局は自己を含む何らかの対象の記述に帰着するという理由で考察か  
ら除外し<sup>2)</sup>、前者に限定する。

確かに、実際に発話するとき、対象の表現として発話されていないことは

ないだろう。だが、このことをいわば無視して、本論ではむしろ、言葉が対象について語るのではなくて、むしろ、(自然言語の)言葉が自ら語る、いな、場合によっては自らを語る仕方について論じようとするものである。本論の表題はそういう方向を表現しようとしたものだ<sup>3</sup>。

では、発話が対象の記述でないとすれば、言葉は自己展開することになるのだろう。しかし、言葉自体は完全な自己展開の能力を欠く。完全な自己展開でもなく、対象による(完全な)統制でもないとすれば、それは矛盾だ。それが本論の主題であって、ここでは、その中間に真実があるということを述べたいと思う。まず本第I編では予備的な考察から始める。

#### 注〔I-2〕

<sup>1</sup> 筆者の専門分野である経済学では「貨幣ヴェール説」という概念がある。アダム・スミスを始めとする古典派の考えで、カネは実物＝モノの動きを表現するだけのもので自律性およびモノへの反作用は無いとする。これに対して、ケインズは、これを否定して、独自の力としての貨幣現象を強調する。ここでの言語と、それが現すとする現実の関係も似ていないことはない。

<sup>2</sup> 例えば、意図の表明は自己および他の対象の将来の状態の記述である。

八木〔1995〕は、言語の種類として「記述」「表現」「能動」の各言語を区別したうえ、さらに「哲学」と「宗教」の言語を区別する。これらは、ある観点・目的からは意味のある分類であることを認めるに吝かではないが、問題もある(特に、前三者と後二者では分類のレベルを異にするとと思われるがそれはここでは問わない)。ここではむしろ、前三者の間の区別を問題にしたい。筆者の考えでは(あるいは、この論文の目的にとっては)この三つをむしろ区別しないで、しかも、区別しないで何ら言語の機能が無規定にしておくのではなく、むしろ、言語の機能(従ってまたその種類)は「記述」に尽きるとしておく(以上の八木の区別は、記述言語の再分類であり、さらに、後二者も、記述言語の働き方である、と見ておくことにする)。あるいは、それは言いすぎだとする懸念があるなら、本論では問題を記述言語に限るという但し書きにしておこう。とは言え、やはり、八木の展開には、問題を言語のレベルに還元し過ぎるという懸念が拭い切れないように思われる——つまり、一種の「唯言語論」の感じが伴う。尤も、本論は、むしろ意図的に「唯言語論」の立場で論じて見ようということだから、いささか奇妙な批評ではあるが(特に〔八木、上述〕, p. 125参照)。

蛇足ながらもう少し言えば、筆者がここで「記述」と言っていることに自他ともに誤解があり得ると思う。というのは、仮りに以上のような言語の色々なジャンルがあるとして(当然在ると思う)、しかし何れのジャンルにおいても、それぞれの

言語表現として、それに相応わしいものがあるだろう——正確/不正確，上手く/下手く言う，言い得ている/いない，発話の意図を伝えている/いない，意味をなしている/いない，等々の区別が。筆者はむしろ，この意味で言語は「記述」だと言いたい気になっている。ただし，言語の機能によっては，以上の区別と目的の達成とは必ずしも一致しないのが問題ではある（ある意図のためには，敢えて言わない方が伝わることもあろうし，わざと不正確に言うこともあろうからだ）。つまり，どのジャンルであれ，その目的に沿って言語が言語として意義を持つのはどうしてか，というのが本論の研究課題なのだ。

本論の終わりに〔V-3〕多少，宗教について触れたのも，以下に展開する自然言語の用い方の応用例としての意味が大きい。

- <sup>3</sup> これは勿論，一種の極端化・極限化，ないしはウェーバーの「理念化」ではある。と言っても，全くのカリカチュアを求めるわけではない。それどころか，以下で明らかになるように，その帰結はその重要性に比べて不当に軽視されてきたもののように思えるような，そういう現象を問題にする。

### I-3 言語の階層

ソシユールに従えば，記号には，記号表現（signifiant）と記号内容（signifiée）の区別がある。これを今更繰り返すのは，ただ以下の叙述を明確にするためであるが，しかしもう少し，本論の叙述に引きつけて整理しておこう。図式的に表現すると以下のような用語法になろう。

図1 言語の階層

本 論	ソシユール
① （自然）名辞	記号表現
② 〔自然〕名辞の対応物 <sup>4</sup> →含意	記号内容？ <sup>5</sup>
③ 〔自然〕名辞の）対象 <sup>6</sup> →属性	

注〔I-3〕

- <sup>4</sup> 「名辞内容」とでもすべき項である。しかし，もしもここにはっきりそれと名指し出来るものが来るとすれば，それは記号表現の意義を無にするであろう。そうしたものを指すために記号表現があるのであり，その「内容」としては，「そうした記号表現によって現されるもの」という以上のことは言えないのだ。このことは特に具体名辞と対比された抽象名辞について強調されなければならない。例えば，「友情」という名辞の「内容」とは，「そう呼ばれているもの」という以上のものではないのだ。それ以上のことは，むしろ「含意」（後述）に属することであろう。

- 5 ソシユールが記号内容として、ここで言う記号の参照対象をも意味していたか、あるいは、その両者をそもそも区別していたかについて疑念が残るという批判があるという。
- 6 八木(上述)は、上記(注2)の区別のうち、特に宗教の言語を特徴付けるものは、記号内容が「通念」ではなくて、真の対象である場合、つまり直接経験を表現する場合だとしている。逆に言えば、普通の言語は、記号内容として「通念」を持っている言語だとしている。そして、自然の含意として、この「通念」は真の現実に対応しないものだとされる。ということは、宗教の言語は、記号内容として(真の)「現実」を持っているということを意味しよう。しかし、これにはカテゴリーの水準の混同は無いだろうか。というのは、上記(図1)のように、記号内容は、それが現実在即したものであれ、そうでないただの「通念」であれ、カテゴリーとしては、いずれにしても対象 referent とは異なるレベルのものである。そして、ある意味で、記号内容を介して現実と触れ合う(触れ合わざるをえない)言語は、いずれにしても現実の忠実な再現では在り得ないのだ(「不立文字」はこのことを事実として断言はできても、それを表現として実現しているとは言えないはずである)。

#### I-4 言語に働く対極的な二つの力

上述の、言語の自己展開と、対象 referent による統制という二律背反的な動きの原動力はもちろん発話者にある。しかし、発話者に与えられた能力は無限定ではない。つまり、発話者の完全なコントロール下でない。それを制約する力は上述の二つ、つまり、対象による統制<sup>7</sup>と、言語の自己展開能力である。しかし、この両者は同じ強度の力でもないし、何より方向が逆である。すなわち、一方は限定を狭めようとするし、他方は広げようとする[図2]。

尤も、狭すぎると言い、広すぎると言い、いずれにしても、一般に言語をもって現実を表現することに伴う困難の問題である。例えばソシユールの「連続的な現実」を「非連続な言語」をもって語る、という対立等がそれだ。

図2 話者の言語コントロールに対する限定

原因	結果(コントロール可能性)
対象による統制	狭すぎる(?) <sup>8</sup>
言語の自己展開	広すぎる

これは言語ヴェール説一般に共通の問題である。

言語が、広すぎる限定の故に話者の（および/あるいは受話者の）統制を逃れる——これが本論の主なテーマを構成する。広すぎる、ということは、話者の能力の限定ではなく、むしろレパートリーの広さであり、従って話者の能力を広げることではないか、と一見したところ思われるかもしれない。しかし、それもやはり、言語ヴェール説に偏した見方であろう。それは、あくまでも、発話の目的を対象記述に求め、言語自体の意義をミニマムに考える観点だ。

本論で問題にするのは、対象を映す限りでの言語ではなくて、それ自体としての言語という存在である。その限りでは、言語の自己展開による統制が広すぎるというのは、一方では、欠陥であり得るが、他方では豊かさでもある。豊かさは、単に発話者/受話者のそれぞれの思惑を超えて言語自体が意味を——しかも無意味（無価値）な意味ではなくて、意味（価値）ある意味を——持ち得るという点だ。ただ、この豊かさは、まさに発話者/受話者の思惑を超える点にあるのだから、それは、言語ヴェール説をもって臨む発話者/受話者/そして誰より観察者にとっては、やはりコントロールを逃れる欠点でもあり得るのだ。

それにしても、ここで、人間——発話者と受話者——は、単に上述の二つの力に翻弄されるだけなのか、それとも、第三の力として働くのだろうか？

先に進む前に、本論の意図する所をいま少し明確にしておこう。

#### 注〔I-4〕

<sup>7</sup> と言っても、対象はもちろん、「自分で」働くのではなく、話者の（対象を言語で反映しようとする）能力と意志を通じて統制する。しかし、それを言えば、言語の自己展開も、話者がその言語を自らに同化し展開する能力に応じて展開するに過ぎない、と一応言えよう。しかし、その点では、むしろ、話者による統制を裏切ったり、超えたりする言語の力が本論では問題になっている。しかも、それは単に話者の能力・意志では如何ともしがたい、「自然に」（受話者に）生じる意味合いが問題になるのだ。

<sup>8</sup> これも何とも言えない。というのは、言語は単なる命名ではない、つまり、輪郭の限られた、截然とした対象がまずあって、それに名付けるといふよりは、まず

言葉があって、それに見合った対象が現実から切りとられるという方が真実に近いからだ [八木, 上述, p. 30]。

多分これと関係あることだと思われるが、文化は一組の語彙を携えているものらしい。例えば、集団としての日本人が海外に定着すれば、その地に必ず「〇〇富士」なる山を発見する（というより創り出す）。動物の名前などもそうで、例えば、「タナゴ」という魚は、海水にも淡水にもいて、全く生物学上の系統とは関係なさそうだ。これは「太初に語彙ありき」だったからではないか？

## I-5 この論文の意図

本論で意図することと意図しないことは、次の通りである。

### I-5-1 この論文で意図しないこと

この論文は次のことを意図しない。すなわち、

1. 言語学プロパーの考察。
2. 自然言語の記号的（ないし人工言語への）翻訳（ないしその逆）の研究。

### I-5-2 この論文で意図すること

それに対して、本論で意図することは、次の通りである。

1. 自然科学、数学以外の分野（古典的に「文化科学」と呼ぶ）の研究活動における自然言語の役割（と「欠陥」）の考察。
2. 自然言語と人工言語（さし当たり、数学およびコンピュータ言語でイメージする）の区別を形式的に与えること。

すなわち、本論では言語学 proper の取扱いでなく、一般に文化科学の一端に携わる者としての筆者が自分の研究領域において遭遇する言語の問題を考察した結果、ある程度一般化して言えるのではないかという事柄を問題にする。それは、言語学の問題とは一応別の問題を提起する。とは言え、その意義においては、言語学的にも決して看過し得ない問題をはらむことだと考えられるのである<sup>9</sup>。

例えば、自然言語の限界に無関心な結果として生じる表現の問題、コミュニケーションの問題等である。あるいは、むしろコミュニケーションの可能性の過大評価の問題である。あるいはまた逆に、コミュニケーションの可能性の過少評価の問題でさえあるかもしれないのである。

自然言語と人工言語の差異は、本論によれば、自然言語の語彙（「自然語彙」と略す——以下同）を使うか否かではない。むしろその用法が区別を決定する。その点の解明が本論の眼目である。この自然/人工の境界は曖昧で可変である。完全な人工言語はあり得る（だろう）が<sup>10</sup>、恐らく完全な自然言語は無いだろう（本論の基準で言えば）。それは用法の問題だからだ。

### I-5-3 純粋な自然言語

純粋な自然言語は存在するか？ それは、一種純粋状態として、全く無反省の態度で言語を使う（発話する）場合に限られる。ちょうど、民俗学で極限的状況としての「常民」を仮定するのと analogical である<sup>11</sup>。それは、架空の、理念型としての、基準としての状況で、現実には存在しない状態である。

#### 注〔I-5〕

<sup>9</sup> 八木（上述）が、やはり、このような、不可避免的に中間的な領域で発言せざるを得ないことを述べているのは、僭越ながら、共感を覚える。さらに、今井賢一〔1996〕が、人間の企業行動の理解のために「限定された合理性」を解明するための鍵の1つとして自然言語の理解もあげている。

<sup>10</sup> ゲーデルの問題等がここに関わってくるものと思われるが、いまはそれに捕らわれる必要は無いと思う。

<sup>11</sup> この問題は到るところで顔を出す。例えば、特に近代の理性主義的哲学で仮定される理性ないし知性は常人のそれというよりは、天才である哲学者のそれであることが多い。しかし、いずれにしても、「自然状態」は理念型かフィクションかの何れかだ。

### I-6 問題の示唆

こうした問題について、和辻の本に面白い展開があるので、導入の一部と

して紹介してみよう<sup>12</sup>。

### I-6-1 和辻の問題提起——「唯言語主義」？

和辻は、その倫理学の展開の端緒に次のような考察を置いている——

「出発点においては我々はただ『倫理とは何であるか』という問いの前に立っている。ところでこの問いは何を意味するであろうか。この問いが言葉によって表現せられ、我々に共通の問いとして議論せられ得るということが、出発点においては唯一の確実なことである。我々は倫理という言葉によって表現せられたことの意味を問うている。そうしてその言葉は我々が作り出したものでもなければまた倫理学という学問の必要によって生じたものでもない。それは一般の言語と同じく歴史的・社会的なる生の表現としてすでに我々の問いに先立ち客観的に存しているのである。」<sup>13</sup>

つまり、和辻は、「倫理とは何か？」という問いが自然言語として発話されて、意味を持つものとして提示できることが最重要だと言うのだ。話すと通じるということは、その発せられた語が語として了解されるということであり、差し当たりその語（および命題）の真理値が問題になるのではない。真理値の問題は既に、その言葉で現されたと了解された対象に関する自然科学的・歴史学的・文学的その他の対象的・事実的研究と、および、その知見と言語表現の一致の問題に属する<sup>14</sup>。

ここでは、そうした研究は言語自体の研究の守備範囲を超えるものと考ええる。ただし、と言っても、言葉自体が対象である文学・言語学、等々の場合もあるので簡単ではないにしても、この点の混同がこれまでの扱いに見られたように思われる<sup>15</sup>。

注〔I-6；I-6-1〕

<sup>12</sup> 以下の議論は、筆者にとって極めて「我が意を得たり」の感があり、だからこそ紹介するのではあるが、同著を全体として読むとき、ここでも余りにも「唯言語論」



的な、…の感を深くする。八木(上述)もやはり、その感を逃れない。繰り返すが、他ならぬ「唯言語論」を展開するはずの本論からすると、奇妙なことだが、これはひっきょう、問題の種類を異にするためでもあろうか。

<sup>13</sup> [和辻, 1994], p. 2。

<sup>14</sup> これも言い過ぎることになり得る。と言うのは、上述(図1)の言語の階層について言えば、言語の「誤謬」は、その三レベル(①名辞; ②名辞の対応物; ③対象)の各一対ごとにズレとして生じ得て、場合によっては、二つの一対が共に誤っていることも在り得えよう。即ち、レベル間の「不一致」について○=真; ×=偽として、(1)①(○/×) ②; (2)①(○/×) ③; (3)②(○/×) ③; (4) [(1)∩(3)] の「真偽」が在り得るからだ ((1)~(4)は各複数通りある)。

本論では、真理値の問題は、暫定的に、ただ、{[(①(○) ②] (○/×) ③} についてだけ問題になるとしておこう。さらに、真偽の問題は、名辞=単語レベルではなくて、命題の問題だということも今は触れないで置く(命題の真偽が問題になる「理論」については後述[V-1-1 以下]を参照。

<sup>15</sup> [白井, 1991]

## I-6-2 その他の事例

本論を構想するきっかけでもあり、またこの奇妙な展開に意義を主張したいと思う理由は、上述のように、筆者が関わる研究領域において、この問題が(と言うより、この問題への無関心が)看過できない結果を生じていると見ないわけにいかないからだ。

以下に二三あげる例は、筆者が身近に見聞きしたささいな例かもしれないが、この論文を正当化するには十分な問題性をはらんでいると思われる。従って、これは、例にあげた当の研究の内容の評価に亘るものではない(ただし、「方法」に一定の疑義をはさむことにはなり得ようが)。

### (事例1)「紐帯」としての関係

何らかの複数の変項が(数量的に)把握され、それらの数値の間に相関係数その他の関連を探り、かつ一定の基準に照らして「有意」の関係の有り/無しを言うのは普通の方法である。問題は、こうして得られた(例えばA, B間の)「有意な」関係に、例えば「紐帯」と命名したとする。それも自由である。だが、もしも、この命名自体を研究の「成果」だとしたら、それは

どうだろうか？ もっと端的に言えば、こうして得られた（「発見」された）A, B 間の関係に、例えば「空気穴」とか「xqr」とか命名したとしたらどうか？

ポイントは、どう命名しようと、事態は変わらないということなのだ（だからと言って、それを「空気穴」とか「xqr」と命名する者はいないだろうが）。

どこが違うかと言えば、それは以下のような点にある（言い替えれば、以下のような違いしかないということが重要なのだ）。

- 1] 「空気穴」とか「xqr」と言われても、直接には何を指すのか明かでない。
- 2] 「空気穴」という名辞には、今問題の関係よりももっと直接に思い浮かばせる対応物がある（例えばチューブに開いた穴）。
- 3] 「紐帯」という言葉には少なくとも「関係」を想わせるニュアンスがある（ではなぜ、「関係」ではいけなかったのか？）。
- 4] 「紐帯」という言葉は、「関係」よりも（まして「xqr」より）「ニュアンス」に富んでいる。例えば、単なる「関係」の脆弱さに比べてその緊りの強固さがある（「切っても切れない」）。つまり、この語は、指定しただけで、話者に代わって語るのだ。

以上の中で、最後の理由が最も重要である。これは、自然言語のアナロジーないし隠喩作用だ。研究者はこの作用の排除に全力を注がねばならないのだが、普通は、その逆にその「自己展開」に身を委ねる。しかし、それが方法的に許されるのは、今問題の対象（AB 間関係）が、「紐帯」という名辞の内包/外延と寸分違わず合致することが証明出来た場合に限る。しかし、そういうことは絶対に有り得ない。というのは、そもそも、「紐帯」という語はこの研究者のこの研究の表現のために成立したわけでも、そのために存在していた訳でもないからだ（自然名辞は「汎用」的だ）<sup>16</sup>。

ただし、このことを意識した上で、名辞自体が「自己展開」して教えてく

れるものに期待するということはあって良からう（上述の和辻の手法はそれだ）。

いずれにしても、命名は何等新しいものを産まない。ただ、その時動員された名辞の「発見力 (heuristic power)」に頼ることは出来る。だが、その場合、自分の推論が、その語のどの含意に基づいたのかを、可能な限り追跡し、特定し、明示する義務があるのだ。

### （事例2）「翻訳」としての異文化接触

筆者が触れたもう一つの例として、異文化接触による文化の融合・変容の過程を「翻訳」と名付けた例がある。これについても、既に上の例で述べたところに尽きる。つまり、ここでも命名による名辞のアナロジーないし隠喩作用が見込まれている。しかも、この場合、命名が上の例よりはずっと豊饒なニュアンスに富んでいる。にもかかわらず、ここでも、当該の対象が「翻訳」という語でカバーされて過不足ないとは言えない。この場合、意図的に、「翻訳」という語が教え・発見してくれることを成果として取り込もうということは、前例に比べて殆ど「方法」の域にまで達しているとさえ言ってもよからう（しかも、相当程度正当に）。それにしても、「翻訳」とは、何よりも（自然）言語間に生じるプロセスである。それは、直接には「文化」の間の関係ではない。例えば文化の場合の翻訳者は誰か？ 等々<sup>17</sup>。

要点は、発見された知見の自然言語による定着は必要であり、どういう名辞に定着させるかは重要であるが、それ自体を成果であると、自他を（特に自分を）偽ってはいけないこと、あるいは、意識的に成果とするならば、むしろその成果の限定に腐心すべきだということである。

#### 注〔I-6-2〕

<sup>16</sup> この点は、非常に重要で、それを言えば、始めから学術用語であったような語は存在しなかったのだから、その意味では、学術用語は、少なくとも始めは比喩ないしアナロジー、ないしは造語だったのだ（これらのことについては後の行論の間にもう少し触れる機会があろう。なお〔長尾, 1987〕も参照）。

- <sup>17</sup> 尤も、言語同士でも、翻訳者なしに、互いに了解や変容や相互浸透の関係が生じることがあるから、その点では文化変容に示唆を与えるところ大だろう。だが、それを言えば、実は、「文化」も「言語」なのだという、コロンプスの卵がある。しかし、例えばムーナン [1995] は、「言語」の意味のこうした無原則の拡大に批判的である。

## Ⅱ 名辞と言語

### Ⅱ-1 名 辞

自然言語の形式的な定義は後述するが、さし当たり、「普通の」各国語としておく<sup>18</sup>。一般に言語は、そして自然言語も、単語からなるが、その全体は語彙（「自然言語の語彙」ないし「自然語彙」と呼ぶ）である。

語彙の中に  $T$  という名辞があるとする（ $T$  は「自然言語の名辞」ないし「自然名辞」と呼ぶ）<sup>19</sup>。

#### 注〔Ⅱ-1〕

<sup>18</sup> 純粋な自然言語は存在しないというのが本論の含意の一つであろう。「純粋な」と言って「完全な」自然言語と言わないのは、自然言語はむしろ（人工言語と比べて）不完全性を特徴とするからだ。あるいは、「完全な」自然言語とは「不完全な」言語のことだとも言える。

<sup>19</sup> 要するに単語である。しかも、以下で徐々に展開していくように、これは端的に名詞、しかも普通名詞をイメージする。固有名詞については独立に論じる。その他の品詞については折にふれて述べる〔特にⅡ-2-2〕。

#### Ⅱ-1-1 含意と属性

各名辞  $T$  にはそれぞれ、それに含まれる含意 (implications) がある（「自然名辞の含意」と呼ぶ）。いや、もっと厳密に言うと、名辞  $T$  の内容的対応物  $\{T\}$ <sup>20</sup>（〔図1〕レベル②）が含意を持つのだ。

それら含意を表す言語表現ももちろん自然名辞である。この含意は、言語レベル（図1）の対象世界のモノをそれぞれ「構成する」属性 (attributes) に対応するものである。

従来の取扱いではこの点での区別が十分に意識されず、自然言語の言語学では「名辞とその属性」といった用語法が出てくる。だが属性はその名辞の referents に属する事柄で<sup>21</sup>、その名辞自体の「属性」ではない。本論では、名辞自体でなく、その対応物（[図1] レベル②）がただ「含意」を持ち得るのみだとする<sup>22</sup>。

もちろん、そもそも話者が何故何らかの語を発話するかといえは、それによって何かの referent について叙述（説明）する為であるという合理的・合目的説明が可能ではある。だがその為に使われるのはもっぱら（自然）言語であって、それ以外の何物でもない。

だから、意図において或る referent の属性についての記述を展開するのであっても、受話者にとっては自然言語の名辞（以下、「自然名辞」と略記）が与えられるだけだ。その時、その名辞のどの含意が用いられたかは不明である。もちろん、文脈（単に統語論的なものだけでなく、意味的連関も）による限定はあるが。

#### 注〔Ⅱ-1-1〕

<sup>20</sup> {*T*} という表記は、「*T* という名辞」が指す対応物（[図1] レベル②）を表記することにする。

<sup>21</sup> 注14のタームで言えば、②名辞の対応物をスキップして、直接に①名辞→②対象として繋げることを意味する。

<sup>22</sup> ややうがった言い方をするならば、名辞の属性は含意であると言えるかもしれない。

#### Ⅱ-1-2 定義と含意

名辞の含意は、論理的に言って、対象の属性に対応する位置を占めるわけである。属性はある対象を定義する。だが、属性の全集合はその対象を定義するに十分でなければならないが、しかし、必要かどうかは分からない。例えば、犬は人間を和ませる性質があるが、それは犬の定義には必要ではない——それは猫でも植物でも芸術でも持つ属性だからだ<sup>23</sup>。

とすると、属性には、ある対象を定義するに(1)十分なものと、(2)十分だが

必要でないもの、(3)必要だが十分でないもの、(4)必要かつ十分なもの、(5)必要でも十分でもないもの、があり得る。この場合、例えば「犬」という対象を、生物学的に捉えることを考えればよい。例えば、〈四脚〉ということは必要である。しかし、これが単独で十分であることはありえない。だから、上のような属性の分類は単独の属性について言っても無意味である。単独に言って意味があるのは、「(5)必要でも十分でもない」場合で、例えば、角を持っている犬が一匹見つかったとき、この属性は標準的な犬には無関係である。つまり、犬一般について語る場合と、たまたま存在する単独の犬とでは、属性が異なることがある<sup>24</sup>。そして、例えば奇形で三脚の犬が見つかったとしても、それは属性とは見なされないという形で処理されよう。同じく、例えば上述の「人を和ませる」というのも同じ範疇に入る。しかし、生物学的には、このような必要でも十分でもないものは、やはり「属性」の数に入れられないという処理の方が便宜であろう。

しかし、名辞の含意ということになると、こうした基準は曖昧になる。あるいは、明確であっても、まるで別の基準で規定される。例えば、〈狐〉という対象<sup>25</sup>にとって、人を化かすということは必要でも十分でもない性質であり、従って「属性」ではないが、名辞 {狐} にとっては、多分重要な含意であろう。

こういう展開をすると、問題が生じる。もしも、このようなことが名辞の含意として認められるならば、およそ、ありとあらゆる連想が含意として認められることになるまいか？ これは、一般に含意の普遍性の問題であるが、もしも連想を含めることになれば、それは極めて個人的・主観的なものになるのではなかろうか？

#### 注〔Ⅱ-1-2〕

<sup>23</sup> 尤も、「属性」という名辞を、「ある対象を定義する必要にして十分な項目」と定義すれば話は別であるが、いずれにしても、本論ではそうした定義は採らない。

<sup>24</sup> ここにも重大な問題がある。referent としての対象 ([図1] レベル③) と言うが、それが意味を成すのは個別的な見本としての個体のみであって、対象としての〈犬〉

[次注25参照] 一般は現実には無いし、あったとしてもイメージ出来ないものだ。それが可能なのは常に {犬} ([図1] レベル②) としてであるに過ぎない ([八木, 上述], p. 94)。

- <sup>25</sup> <T>という表記は、Tという名辞が指す対象 ([図1] レベル③) を表記することにする。

## II-2 連想について

ブルーストを持ち出すまでもなく、何かある事象が他の何か別の事象の想念を誘うのは何も具体的事象に限ったことではなく、言葉でも同じだ——発話された言葉も「事象」なのだから。コーヒーの香や梵鐘の音にも劣らず、見た字面、聞いた言葉でもそうすることはある。しかも、そうして呼び起こされた想念・記憶とそのきっかけとは何の必然的な関係も無いことがあるのは、言葉であれ、その他の事象であれ同じである<sup>26</sup>。

このように、連想を喚起するという性質は、言語としての言語の属性ではなくて<sup>27</sup>、事象一般（言語も発話是一種の事象だ）の性質の一部と考えるべきであろう。

だから、名辞の含意はそうした偶然的、純主観的な連想現象に関わる限りのものでなく、言語としての言語、つまりある種の客観的で、恒常的で、何らかの合意されたものに限られなければならない。だが、にもかかわらず、それは決して明確な外延・内包を指定できるには到らないだろう。

これは、単なる対象的な科学的知識の問題ではない。狐が化けるのも、鰻が山芋から生じるのも、現代では否定されているが、これらが歴史的含意として残ることは否めない事実だ。

### 注〔II-2〕

<sup>26</sup> ここでいう、原因事象と喚起された想念との「無関係」というのは、ソシユールの共時的な記号の恣意性というのと、あるいは、条件反射における刺激と反応の関係の恣意性というのと同じ意味であって、そういう反応が生じることの必然性とは矛盾していない。

<sup>27</sup> 尤も、この点は正しいとして、言語ないし名辞が記号としてコミュニケーションの機能を果たすのは、この想念喚起作用にあることは確かだ。従ってまた、この作

用を果たさないような記号（言語）表現は、機能的ではないことになる。この点については、名辞の満たすべき条件、および名辞の恣意性との関連で後に論ずる機会があらう。

### Ⅱ-3 名辞の形式的諸規定

「名辞 (terms)」という名辞についてももう少し形式的な規定を与えておこう。

ある名辞  $T$  は、ある自然言語のありとあらゆる可能な語彙集合  $W$  の要素である：

$$(式 1) \quad T \in W^{28}$$

この  $W$  は、およそ考えられる限りのありとあらゆる名辞の集合なのだが、実際問題として、その全体に関わり（知り/利用/理解し）得る単独の個人も、あるいは単独の集団も、単独の時代も無いだろう。現実には、コミュニケーションの可能な実際の範囲内（主体、時）において、その部分集合  $W'$  が問題になるだけであらう<sup>29</sup>：

$$(式 1') \quad T \in W' \subset W$$

いずれにしても、 $W$  や  $W'$  は固定的ではなく、増減が常にある。

この名辞  $T$  の内容的対応物  $\{T\}$  [図 1 ②] に「分析的に」<sup>30</sup> 属するものとして幾つかの名辞、つまり名辞  $T$  の  $\{T\}$  の含意<sup>31</sup> が呼び出される：

(名辞  $\{T\}$  の含意)

$$I(T) = \{T_1, T_2, T_3, \dots\}^{32}$$

これらは、 $T$  の「形式的に分析的な含意 (formally analytical implications of  $\{T\})$ 」ということになる<sup>33</sup>。

もちろん、これらの含意を構成するのも自然名辞であり、それらもまた、当然ながら、上記と同じありとあらゆる可能な語彙の集合の要素である（この点は以下では繰り返さない）：

$$(式 2) \quad T_1, T_2, T_3, \dots \in W;$$



あるいは,

$$(式 2') \quad T_1, T_2, T_3, \dots \in W'$$

これらの含意  $T_1, T_2, T_3, \dots$  もまたそれぞれ自然言語の名辞であるから、それらも当然またそれぞれ分析的含意を持つ：

(名辞  $\{T\}$  の含意の含意の含意)：

$$I(T_1) = \{T_{11}, T_{12}, T_{13}, \dots\}; I(T_2) = \{T_{21}, T_{22}, T_{23}, \dots\};$$

$$I(T_3) = \{T_{31}, T_{32}, T_{33}, \dots\}; \dots$$

同じことはさらに  $T_{11}, T_{12}, T_{13}, \dots; T_{21}, T_{22}, T_{23}, \dots; T_{31}, T_{32}, T_{33}, \dots; \dots$  についても言える。

これらの含意もまた自然語彙に属する：

$$(式 2'') \quad I(T_1); I(T_2); I(T_3); \dots \in W;$$

あるいは,

$$(式 2''') \quad I(T_1); I(T_2); I(T_3); , \dots \in W'$$

同じことは、無限に進めることが出来よう<sup>34</sup>：

$$(名辞 \{T\} の下位の含意) : \quad I(T_{ij}) = \{T_{ij1}, T_{ij2}, T_{ij3}, \dots\}$$

これは、形式的に分析的な含意の階層構造 (hierarchical structure of the formally analytical implications of  $\{T\}$ ) である。

#### 注〔Ⅱ-3〕

<sup>28</sup> 本論で、数学（ないし記号論理学）まがいの記号を使うのは、止むを得ない選択と了解されたい。なぜなら、他ならぬ自然言語の曖昧さを問題にすると、同じレベルの言語を使ってそれを論じる訳にはいかない事情もあるからだ。

<sup>29</sup> 上述の連想の主観性はここにも関連する。

<sup>30</sup> 真に「分析的」であるか否かの考察は後述。

<sup>31</sup> 正式には「名辞  $T$  の  $\{T\}$  の含意」という語法が正しいのだが、以下では、便宜的に簡略呼称として「名辞  $\{T\}$  の含意」という言い方もすることにする。

<sup>32</sup> ここでは  $\{\dots\}$  は普通の集合の記号である。

<sup>33</sup> 前注30に述べたように、「分析的」という言葉をここで使うのは無理があるので、「形式的に」という但し書きを付けておく。そもそも、「総合的」と一対のものとしてこの語を使うのはカントに由来するものと思うが、この区別は必ずしも解像力の大きい概念ではないように思われる（例えば、数学が——この無上の「分析的」分野が！ ——「総合的」な知識に分類されたりするのを見れば推して知るべしだ）。

いずれにせよ、ここでの眼目は、含意は形式上、名辞  $\{T\}$  の含意  $I(T)$  は、あたかも  $\{T\}$  から演繹された、ないし「自己展開」したかのような外観を採るということなのだ。「形式的」はもちろん、「実質的」(論理的、因果的、[真に]分析的、等々)に対比される言葉だが、この区別は以下でも様々な形で出てくる。もちろん、前者——「形式的」——の方が制約は緩いとともに、逆に、後者も必ずこの形を満たしていなければならないのはもちろんである。

- <sup>34</sup> 言い替えれば、階層の深度(後述)が無限大だということだが、これが、後述の自然言語と人工言語との形式的な区別に関わることは殆ど明かで、予めここで、自然言語については、この深度が無限大、人工言語については有限(かつ確定)と述べておこう。

ただし、ここで、「深度」と言っても、自然言語の場合には、それは分析的にメタ言語へと次第に深まって行くとは限らないことに注意しなければならない。なぜなら、次第に「深まる」階層も依然として自然言語の名辞から成るからだ。

例えば、 $\{\text{男性}-\text{厳しさ}-\text{優しさ}-\dots\}$  と  $\{\text{女性}-\text{優しさ}-\dots\}$  という分析的階層構造があったとして、「男性」という名辞において第3階にある「優しさ」という名辞は「女性」において第2階にあるのと同じ名辞である。つまり、それ自体として含意の「深い」名辞は無いのだ。このような自然言語の「リゾーム」状態については後述 [N-3]。

## II-4 含意の階数

上述のように、名辞  $\{T\}$  の分析的含意  $T_1, T_2, T_3, \dots$  のそれぞれはまた自然言語の名辞であり[式(式2''), (式2''')], 従ってそれぞれの含意  $I(T_1), I(T_2), I(T_3), \dots$  を持つ。これらは、もとの名辞  $\{T\}$  から見れば第2階の分析的含意 (implications of the second order) である。それに対して、 $I(T)$  は第1階の含意である。

第2階の含意のある部分集合を  $I_k(T_1), I_k(T_2), I_k(T_3), \dots$  とする。すなわち：

$$I_k(T_1) \subseteq I(T_1), I_k(T_2) \subseteq I(T_2), I_k(T_3) \subseteq I(T_3), \dots$$

(この段階では、 $I_k(T_1) = I(T_1), I_k(T_2) = I(T_2), I_k(T_3) = I(T_3), \dots$  の場合を含む)。

ここで、添字  $k$  は、話者(主体)、その観点、同一話者の状況、視点、などを表すものと了解されたい。

## II-5 名辞についての記述と命題

$T$  という名辞についての陳述（ないし命題）を定義しよう。

まず集合の要素間の関係を表す記号  $R$  を導入する：

(定義) 集合の要素間の関係の陳述

集合  $S = \{S_1, S_2, S_3, \dots\}$  に対して,  $R(S) = R(\{S_1, S_2, S_3, \dots\})$  のような  $R$  を, 集合  $S$  の要素間の関係に関する記述と呼ぶ<sup>35</sup>。

このとき, 集合  $S$  に関する命題を次のように定義する：

(集合  $S$  に関する命題)

集合  $S$  の部分集合  $S'_i; i=1, 2, 3, \dots$  をとったとき, それらに関する関係の記述  $R$  の集合：

$$\{R'_i(S'_i)\}; i, j=1, 2, 3, \dots$$

を, 集合  $S$  に関する陳述ないし命題と呼ぶ。

これを用いて, 名辞  $T$  に関する命題を次のように定義する。

$\{T\}$  の分析的含意の集合  $I(T)$  のある部分集合を  $I_k(T)$  とする。すなわち：

$$I_k(T) \subseteq I(T); k=1, 2, 3, \dots$$

(この段階では,  $I_k(T) = I(T)$  の場合を含む)<sup>36</sup>。

これを用いて, 次のような記述<sup>37</sup>を名辞  $T$  に関する陳述（ないし命題）(the statements or propositions about  $T$ ) と呼ぶ：

( $T$  に関する陳述 [ないし命題]  $P(T)$ )

$$(式 3) \quad P_k(T) = \{R_k^n(I_k(T))\}; k, n=1, 2, 3, \dots$$

つまり, これは,  $I_k(T)$  の要素間の「論理的」関係の記述の総体である。

ここで「論理的」ということは説明を要するが, それについてはすぐ後に論じるが [II-8], その前に, 命題の階数, および, 分析の濃度について説明しておく。

## 注〔Ⅱ-5〕

- <sup>35</sup> 普通の数学や論理学では、「集合  $S$  の要素間の関係」とだけ言って、その「記述」とは言わないだろうが、ここでは、それを言語で表したものと指定する。
- <sup>36</sup> 当然ながら、このような部分集合は多数ある。もしも含意の密度（後述）が無限大なら、 $k=1, 2, 3, \dots, \infty$ となる。
- <sup>37</sup>  $T$  と名付けられた対象  $\langle T \rangle$  についての記述ではなく、名辞  $T$  そのものの記述である。

## Ⅱ-6 命題の階数

次のような命題を、初めの  $T$  に関する命題、つまり第1階の命題 (propositions of the 1st order) に対して、第2階の命題と呼ぶ。

## (第2階の命題)

$$(式4) \quad P_k(T_i) = \{R_k^n(I_k(T_1), I_k(T_2), I_k(T_3), \dots)\}; k, n=1, 2, 3, \dots$$

つまり、 $I_k(T_1), I_k(T_2), I_k(T_3), \dots$  の内部での要素間、あるいはそれらを越えた要素間の論理的関係の記述の総体である。

(第  $m$  階の命題)

一般に、第  $m$  階の命題は次のようになる：

$$(式5) \quad P_k^n(T_{ij\dots w}) = \{R_k(I_k(T_{ij\dots w}))\};$$

$[ij\dots w]$  は計  $(m-1)$  個の数字の列； $k, n=1, 2, 3, \dots$

## Ⅱ-7 深度を持った記述

## (定義) 記述の深度

$[ij\dots w]$  が計  $(m-1)$  個の数字の列であるとき、命題の階数  $D$  を次のように定める：

$$(式6) \quad D\{P_k^n(T_{ij\dots w})\} = m$$

階数  $m$  の命題を持った場合、名辞  $T$  は  $m$  の深度  $D$  の記述を持つと言う。

また、一般に、深度  $>1$  の場合、記述は深度を持つと言う。

ただし、ここにやや込み入った問題もある。例えば、記述に

$$R_k^n(T_1, T_2, \dots; \{T_{ij}\})$$

のように、階層の異なる含意〔第1階の  $T_i$  と第2階の  $\{T_{ij}\}$ 〕が交わることもあるとしよう。この場合には、この  $\{T_{ij}\}$  は  $I(T_i)$  ではなくして、第1階の含意  $I(T)$  の資格で参加している。従って、この場合には依然として第1階の命題に留まる。つまりこれは、依然として深度=1の命題である。

与えられた名辞  $T$  について色々な深度の命題が作成できるわけだが、それらの深度を異にする命題群の間関係はどのようなものだろうか？

### II-7-1 記述の深度間関係

一般に、階数の異なる命題間関係は、上位の（階数の少ない）命題に対して下位の（階数の多い）命題がその理由ないし根拠の役割を果たす。例えば：

名辞  $T$  に対して、第1および2階の命題：

$$\begin{aligned} (\text{第1階}) \quad P(T) &= \{R_k^n(I_k(T))\} \\ &= \{R_k^n(T_1, T_2, T_3, \dots)\} \end{aligned} \quad \text{①}$$

および

$$(\text{第2階}) \quad P_k(T_i) = \{R_k^n(I_k(T_1), I_k(T_2), I_k(T_3), \dots)\} \quad \text{②}$$

が並立した場合、②は、①が成立するための「根拠」の位置を占める。

以上のことは、名辞という記号の性格から直接出てくるものだ。すなわち、記号というものは、「それ自体」では何物をも意味せず、従って、互い関係の理由も提供しない。その理由はそれぞれに属する下位の含意の関係によって与えられるのだ。

深度  $D(P_k) > 2$  の命題も、以上に準じて考える。

### II-7-2 含意の濃度

次に名辞  $\{T\}$  の分析的含意の濃度  $N$  (density of formally analytical implications) について説明しよう。

(定義) 分析的含意の濃度  $N$

例えば,  $T$  の分析的含意  $I(T) = \{T_1, T_2, T_3, \dots, T_n\}$  の濃度<sup>38)</sup>は,

$$N\{I(T)\} = n$$

である。

以上の準備を経たので, 上述 [Ⅱ-5] の命題を構成する論理の問題を考えることができよう。

#### 注 [Ⅱ-7]

<sup>38)</sup> この用語は, 本来,  $T_1, T_2, T_3, \dots$  が連続である場合にふさわしいものだ。非連続なら「含意の数」とするのが良いかもしれない。しかし, 数としても, 個々の名辞が重要性に関わらず平等に 1 単位として扱われる点に問題があるかもしれない。

だが, それらは個々の名辞だから, 連続であることはありえない。ただし, 例えば,  $T_1$  = 濃緑,  $T_2$  = 緑,  $T_3$  = 薄緑,  $\dots$  というふうにある程度の「連続性」を表現することは出来ようが, 厳密には不可能だ。

この事情は人工言語でも変わらない。言うまでもないことだが, このことは, 例えば  $T_1$  = 〈全ての実数〉で, 従って連続だ, というようなこととは全く関係がない。ここではあくまで  $T_1, T_2, T_3, \dots$  間の連続を問題にしているのだから。表現としてベクトルないし集合の形をとれば, この点で考慮の余地はないだろう。

## Ⅱ-8 命題を構成する「論理」について

上で [(式 3)] 名辞  $T$  に関する命題

$$P(T) = \{R_k^n(I_k(T))\}; k, n = 1, 2, 3, \dots$$

は  $I_k(T)$  の要素間の「論理的」関係の記述の総体であると述べ, 「論理的」ということは説明を要すると述べたが, それを以下で検討しよう。

それは, 厳密な意味での分析・演繹, あるいは因果の関係のみではありえない。むしろ, 上述 [Ⅱ-2] の連想に近い関係までも含む。しかし, その場合は, やはり上述した注意が妥当する。つまり, それらの関係が論理的・演繹的に成立すると感じられるまでに客観化, 共通化, 固定化, 恒常化していなければならないのだ。

ところで、ある名辞  $T$  についての命題を造るということに関する以上の展開では、果たして新奇な、あるいは任意の命題は造り得るのだろうか、という問題が生じよう。けだし、以上によれば所与の「分析的」含意の間の「論理的」な関係、ということは「必然的」な関係だけを展開しなければならないのだから、何か新たな、あるいは「総合的」な、あるいは主観的な、命題は作成し得るのだろうかという問題が生じるだろう。

とりあえず、この異義の前提を認めたとして、反論を試みよう。その前提とは、繰り返せば、

- (1) 「分析的」含意の所与性と、
  - (2) その所与の項目の間の「論理的」、つまり「必然的」な関係
- ということであった。

こういう条件のもとでは、所与の名辞  $T$  について何か新奇、ないし独創的、ないしは話者の特殊な観点・趣味・主張等々を含んだ（ないしは表明する）命題は作成し得ないのではないかというものであった。

これに対する反論は容易だ。それは、言語の内在的自己統制のためである。それには2通りの範疇がある。

## Ⅱ-9 自然言語統制——実質的/形式的統制

自然言語は、以下の2通り、つまり実質的および形式的の統制を受ける<sup>39</sup>。

### 注〔Ⅱ-9〕

<sup>39</sup> それでは、人工言語の場合はどうか？ 実質的統制については、後述の無尽蔵性は妥当しないから、統制は十分狭い範囲で成り立つ。また、形式的統制については、自然言語が、「実質を欠く」場合もあるという意味で「形式的」である（「形式的に分析的であり得る」）のに対し、人工言語は「実質的に形式的」である。つまり、「真に分析的」である。

ここには、完全に（真に）分析的であるためには、含意の深度/密度が有限でなければならないという関連が窺えるのである〔後注48参照〕。

### II-9-1 自然言語の実質的統制——自然言語の無尽蔵性

ここに関わる最も重要な問題は、自然言語の無尽蔵性 (the inexhaustibility of natural language) である。これは自然言語の定義そのものに関わる点でもあるのだが、それは後述するとして [III-2]、ここでの要点は、以上のような制約は余りに広すぎて、實際上何の問題も生じないということだ。この点は既に上述した (図2) 言語の自己展開による統制と同じ趣旨になる。

このような自然言語の「無尽蔵さ」はどこに現れる、あるいは、どこから生じるのだろうか。

1) まず、圧倒的に語彙の豊富さがある。それは、一方では、過去に生じた語彙とそれらの含意も、歴史的な存在として、大部分は生き残るし、さらに、未来に向かっては潜在的に増加の傾向を持っている。結果として、現実にも潜在的にも、語彙の豊富さ、汲み尽くし難さになる。これを表現するために、「語彙の濃度」の概念を定義しておこう：

(定義) 語彙  $W$  の濃度  $N(W)$

$$N(W) = \# [T | T \in W] \text{ (語彙に含まれる名辞 } T \text{ の数)}$$

2) 次に、自然言語の汲み尽くされ難さは、以上のような豊富な語彙を構成する各々の名辞の含意の濃度 [II-7-2] および深度の大きさに由来する。

### II-9-2 自然言語の形式的統制

言語の形式的統制は、自然言語に限らず、言語の本質から出てくることだが、それはこういうことだ：

およそ造られた命題が、いかに意図において独創的、新奇、「総合的」、「芸術的」その他諸々であれ、結果としては、上記の要件を満たさなければならないのだ。満たさなければどうなるかと言えば、それは命題の身分を構



成しない、あるいは、もっと普通に言えば、語法的・意味論的に誤り、あるいは、もっと実も蓋も無い言い方をすれば、単に意味が通じない/不明だということに過ぎないのだ。つまり、およそ、意味のある命題はある条件を満たしていなければならないのだ。つまり、命題の満たさなければならない条件はこうだ：

(条件) 命題の形式的<sup>40</sup>論理性 (formal logicalness of propositions)

つまり、およそある名辞に関する命題はその名辞の（何階かの、形式的に分析的な）含意の間の論理的関係として提示されねば、命題と言えないのだ。

しかし、以上の議論は（実質についても形式についても）余りに形式的に過ぎ、木で鼻をくくったものではあるまいか？ 前者は、いわば何も制約として利かないと言っており、後者は条件が自動的に満たされていると言う…<sup>41</sup>。

もちろん、以上の論を訂正する必要はない。これは上述の異義の提示する条件を承認しても可能な反論である。だから、本来の論点は、含意が「形式的に分析的」だということと、命題の論理の「形式的必然性」の関係である。両者の必然性は同じことではなくて、一応別のレベルに属することである。つまり、名辞 *T* の分析的含意だけからなり（この点は前提されている）、しかも、[1]論理的・必然的命題が造られないということがあるか？ また、[2]そうして得られた「必然的」命題は、分析的含意から見て「意外性」を持っているか？ ということだ。後者はそれら命題が「情報」を担っているか（あるいは、そもそも「情報」であるか）ということだ。

さらに、以上のように、結果として形式的な含意の分析性、および、論理の必然性が得られるにしても、それが初めから与えられているわけでも、固定されている訳でもないことは明かである。それはあくまでも結果としてそうになっているのだ。だからこそ、形式的なのだ。

今少し、命題の論理性について敷衍しよう。名辞  $T$  についての命題 [(式 3)  $P_k(T) = \{R_k^n(I_k(T))\}$ ] が成り立つのは、名辞  $T$  の含意  $\{T_1, T_2, T_3, \dots\}$  の間に、広義の、ないしは形式的な、論理的関係が生じるからだが、それが生じ得るのは、これもまた記号にすぎない含意である名辞  $\{T_1, T_2, T_3, \dots\}$  の故ではない——記号自体には何の関連も無いのだ。 $T_1$  と  $T_2$  が「論理的に」関連するのは、それらが含む含意  $\{T_{i1}, T_{i2}, T_{i3}, \dots\}, i=1, 2$ , の故であろう。つまり、含意  $T_{ij}$  同士の論理的関係は、 $T_1$  と  $T_2$  の「論理的」関係の、言わば「根拠」になっているのだ (上述 [II-7-1]「記述の深度間の関係」参照)。

しかし、だからと言って、この定式を、初めからこの2つの階を含むように、例えば  $I(T) = \{T_1, T_2, T_3, \dots; \{T_{ij}\}\}$  としてしまえば、この  $T_{ij}$  は本来の2階の含意ではなくして、1階の含意  $I(T)$  の一部分になってしまい、 $T_{ij}$  の所属階層の階数が本来と異なり、 $T_i$  の一つになってしまう (上述 [II-7]「記述の深度」参照)。つまり、 $T_{ij} \rightarrow T_i$  となってしまう。だが、ここでもこのレベルの「乱れ」が問題になるのは、名辞の範疇として異なったメタ・レベルのものだからというのではなく (名辞としては全て語彙  $W$  に同じレベルで含まれている)、与えられた  $T$  についての階層の区別についてに過ぎない (IV-3 を参照)。

次に、本論の主要論点にかかわる自然言語と人工言語との、形式的区別の問題に入る。ここでも、ポイントは形式的なものである。いわゆる、常識的な意味での自然な語彙を用いるか否かは、ここでの区別とは関係ない。以下の展開はかなりストレートであり、単純に見えるかもしれないが、そのように割り切って提示することこそ、本論の主眼の一つを構成するのである。

#### 注 [II-9]

<sup>40</sup> ここでも、上記注30の注意が当てはまる。

<sup>41</sup> これはもちろん、上述 [II-3] の「形式的に分析的」な含意から生じる帰結である。

### Ⅲ 自然言語と人工言語

言語は語彙から構成され、語彙とは名辞の集合である。したがって、この構成語彙の種類が、同時に、それらから成り立つ言語の種類をも定義する<sup>42</sup>。

#### 注〔Ⅲ〕

<sup>42</sup> もちろん、言語は語彙だけでは規定されず、その用法（文法、統語法、意味論、等々）からも構成されるから、それらについても規定する必要があることは明らかだが、それらについては以下で必要な限り論じていく〔特にⅣ-2-2 参照〕。ただし、何度も繰り返すが、以上の所でも、名辞の話しは同時にその用法の議論と切り離せないのであり、そのようなものとして展開してきた。ただ、その「用法」の意味が、普通に注目される場所とはやや視点を異にしている。

#### Ⅲ-1 自然言語と人工言語 (Natural and Artificial Languages)

ここで、名辞の種類として、自然語の名辞（「自然名辞」と略記する）と、人工語の名辞（「人工名辞」）を区別する。

##### （定義）自然言語と人工言語

「自然名辞」を語彙とする言語は自然言語でありと、「人工名辞」からなる言語は人工言語である<sup>43</sup>。

次に、名辞の種類としての「自然名辞」を消極的に定義し、「人工名辞」積極的に定義する。

##### （定義）自然名辞と人工名辞(1)

何らかの分析的含意を（網羅的、かつ明画に、存在する階数を全て尽くして）列挙して<sup>44</sup>、その総称として与えられる名辞は「人工名辞」である<sup>45</sup>。そうでない名辞は「自然名辞」である。

ここでも、これまで再三示唆してきたように、次のような誤解、つまり、例えば「日本語は自然言語だから、…」とか、「数学は人工言語だから、…」とかいう類の推論は採らないことが重要だ。むしろ、ここでの立論は、「日本語は自然言語だろうか」、とか、「数学は人工言語だろうか」、あるいは、もしも日本語は自然言語であり、数学は人工言語だとすると、それは何故か、といったタイプの問いをめぐるものである。日本語は十分自然言語でなく、数学は不十分な人工言語かもしれないのだ。

以上の展開をもう少し形式的に整理しておこう。

### 自然名辞と人工名辞(2)——必要/十分条件

自然/人工に関わらず、およそ言語の名辞に関して成立しなければならないトリビアルな必要条件は、その言語の語彙に含まれる名辞  $T$  の数がゼロではないことである。すなわち、

(定義) 自然名辞と人工名辞の必要条件

$$(式6) \quad N(W) = \# [T | T \in W] > 0 \quad [\# [T] \text{ は } T \text{ の個数}];$$

あるいは同じことだが、

$$(式6') \quad \{T\}(\in W) \neq \phi \quad [\phi \text{ は空集合}]$$

それに対して、十分条件の方は両者で異なる。

### 注〔Ⅲ-1〕

<sup>43</sup> 問題があ。一般に事実であるように、以上のような意味での「自然/人工」の区分は、同一言語を構成する語彙の中の名辞毎に異なるであろう。例えば、日本語を使って経済学や数学の論文を書くときには、語彙の一部は自然的で、他は人工的であろう。とすると、そうした言語は混合型になるであろう。

ただし、「混合型」の類型は別にも生じ得て、むしろそちらの方が重要である。つまり、そもそも所与の語彙が自然/人工のいずれに属するかがかなり曖昧であるというのが、自然言語の特性の一つである（人工言語の語彙は、注意から洩れる場合を除けば人工的である）。つまり、純粋な自然言語は無いのであり、その意味で、名辞は中間型であり、そうした中間型の語彙からなるという意味で、普通の言語は中間型なのだ。

ただ、本論の問題の建て方は、例えば「日本語は自然言語か否か」というものではなく、日本語という素材を使って自然言語も（半/疑似）人工言語も語られているというのが重要な認識なのだ（V-2-1 参照）。

- <sup>44</sup> これは、必ずしも実際に網羅することを意味しない。そうする代わりに、明確なルールで曖昧さと過不足無く規定できればそれでも良い（あるいは、それ以外には与えようもない場合もある）。例えば、数学で「全ての実数」という規定があるが、これは明確（分画的）であり、また、それを実際に例示する方法は無い（無限大の個数を列挙することはできない〔後述 V-2-2〕「列挙法」参照）。普通の語で、例えば「全ての全く罪を犯したことの無い人々」も同じく許される。これが、実際の対象との照合が可能かどうかはどうでもよい（一般に不可能だ——「罪を犯す」という判定基準が不明だから）。

- <sup>45</sup> これは、奇妙な状況を描写していることにはなる。普通、名辞の含意というものは、（定義により、形式的に）分析的だから、まず名辞が与えられて、その名辞の含意が探られ、規定され、明示され、限られるというのが順序である。もちろん、このことは、以上の構成が一体となって成立している状況ではそのような「分析的」外観をとるのだが、ここでは、文字通りにとれば、名辞が与えられないうちにその含意を細大漏らさず列挙しておいて、しかる後にその複合体の名称としての名辞を与えると言うのだ。もちろんそれは不可能ではない。何らかの名詞を名称として与えることを前提としつつも、その名前は未定にしておくということも可能だからだ。しかし、その場合、この構成物は、少なくともその出生においては、極めて「総合的」だということになる。

だが、ここでは、必ずしも、この構成物を構成する発生的順序のことを言っているのではない。むしろ、上の定義は、発生経路はどうであれ、成立したものが上述の定義に合致した状態を示していれば良いのだ。

こうしたことが普通の自然語彙については稀にしか起こらないのは容易に分かる。自然語彙は「まずそこに存在して」いるからだ。しかし、他方では、所与の自然語彙を素材にして「造語（coinage）」が行われる。その内容は、自然語彙の含意の限定、含意の拡張、および、記号（音/形）の変形である。この場合には、形は自然語彙でも内容は人工的であり得る（造語については後述〔V-2-2〕「列挙法」と「自然名辞賦与法」を参照）。

### Ⅲ-2 自然名辞の無尽蔵性

まず、名辞の深度を定義しておく。

（定義）自然名辞の深度

以前に〔Ⅱ-7〕、ある名辞  $T$  に関して、第  $m$  階の命題を定義した〔(式 5)  $P_k^n(T_{ij\cdots w}) = \{P_k(I_k(T_{ij\cdots w}))\}$ 〕このとき、 $[ij\cdots w]$  が計  $(m-1)$  個の数

字の列であるとき、命題の深度  $D$  を

$$D\{P_k^n(T_{ij\dots w})\}=m$$

と定めた。このような命題を造れるような含意の階が存在するとき<sup>46</sup>、この名辞の深度  $D$  は  $m$  である。

(定義) 含意の深度  $D$  が無限大の名辞

もしも、ある名辞の深度  $D$  が無限大のとき [ $m=\infty$ ]、この名辞  $T$  の含意の深度は無限大である。

これにより、自然言語の十分条件を次のように定める

(定義) 自然名辞の十分条件

[1]名辞の深度が無限大で、[2]各名辞の各階の含意の濃度が無限大である<sup>47</sup>  
名辞は自然名辞である。

これは、以前 [Ⅱ-9-1] に述べた自然言語の無尽蔵性の内容である。これを印象深く、「定理」として述べておこう：

(定理) 自然言語の無尽蔵性定理

自然言語はその語彙の含意の深さ、広さにおいて無尽蔵である。

名辞の含意はいずれにしても形式的に分析的なのだが、以上のように見た場合、形式的にさえ疑似分析的と言えるかもしれない<sup>48</sup>。

自然言語との対比で言えば、人工言語の含意は真に分析的であると言える<sup>49</sup>。

(定義) 人工名辞の十分条件

[1]名辞の深度が有限で、[2]各名辞の各階の含意の濃度が有限である名辞は人工名辞である<sup>50</sup>。

要するに、自然言語は、純粹かつ完全な含意を確定出来ない、しかも数も

確定できない、名辞により構成される陳述からなる言語である。

注〔Ⅲ-2〕

- <sup>46</sup> 上で〔Ⅱ-9-2〕命題の論理を問題にしたとき、分析的含意が存在することと、それらの間で論理的な命題が造れるかどうかは一応別のことであると述べたことを想起されたい。
- <sup>47</sup>  $T$  の個数 [(式6)  $N(W) = \# [T | T \in W]$ ] が無限大  $[=\infty]$  ということは、この十分条件の必要条件をなしているであろう。
- <sup>48</sup> これまでは、ある名辞  $T$  の含意  $T_i$  や  $T_{ij}$  等が分析的かどうか、という問題の建て方をした。しかし、別の観点もあり得るのではないか。つまり、個々の含意ではなくて、元の名辞  $T$  自体が「分析され尽くしている」かどうかという基準である。そういう基準からすれば、自然語彙は全て少なくとも不完全にしか分析できではない。もっとも、含意の展開がどの単独の主体にとっても展開され尽くしてはいないのが自然言語であるから、それが顕在化/明示化しているかどうかは無関係かもしれないが〔上注39参照〕。
- <sup>49</sup> もっとも、例えば数学で、研究の内容を成すのは、与えられた「名辞」から生じる、より深い含意および/あるいは新たな命題であるから、どの時点においても分析され尽くしたとは言えないであろう（名辞の指定とともに研究が終わるのはやはり稔りの多いことではないだろう）。その意味では、人工言語の場合には、潜在的な分析可能性が問題になるであろう。
- <sup>50</sup>  $\text{not} [\text{自然名辞の十分条件}] = [\text{人工名辞の十分条件}]$  とはなっていない。つまり、これは前者の条件の全面否定 ( $\text{not}[1] \cap \text{not}[2]$ ) になっているが、その中間には前者の[1]と[2]の一方のみの否定 ( $\text{not}[1] \cap [2]; [1] \cap \text{not}[2]$ ) があり得る。これらは何らかの意味で中間なのだろうが、それらについては今は問わない（上注43も参照）。

## Ⅳ 展 開

以上のところでは、自然言語と人工言語との区別の概略を形式的に与えた。以下では、その細部に亘る議論で補いつつ、本論の目的でもあった、言語を使う——特に研究に使う——ときに生じる問題との関連について検討を進めていきたいと思う。

### N-1 記号の恣意性

#### N-1-1 ソシユールから出発して

共時態における言語の記号の恣意性もソシユールの提起した重要な概念だ。その理論は普通、例えば日本語の「牛」に当たるフランス語が「boeuf」で英語では「bull」だ、といった例とともに与えられる。しかし、この問題に筆者はそれより遥かにプリミティヴで、また（にもかかわらず）私見では遥かに深刻な問題を見る。それはこういう問題だ。

例えば、日本語で「ushi」と発音され「牛」という四画の漢字という名辞で表されるこのものが、なぜ、例えば「はよや」だとか「xyz」だとかの名辞で呼ばれるようにならなかったのか、という問題だ。これは、ソシユールが通時態における各記号の発達の必然性として解答を与えた、あの問題をおうとしているのではない。

ソシユールの与えた説明は、「無意味な」記号についてではない。確かに、「ushi」という音にも「牛」という字面にも対象としての〈牛〉を彷彿とさせるものはない（他方、例えば矢印のような「象形文字」にはそれなりの意味が彷彿とする面があるのに対して）。にもかかわらず、「牛」という語が語源的、歴史的に成立して日本語に入ってきた由来は、「歴史的必然性」（歴史的決定論的にではない）によって原理的に説明できる。その意味では、それ



は「意味のある」記号だ。

それに対して、ここで、「はよや」だとか「xyz」だとかの例で示そうとしたのは、そうした歴史的な重みも由来も必然性も全く無い記号としての例だ。「自然」言語としての実在の諸国語がそういう記号を採用しなかった必然性は明らかだ。しかし、それは歴史的事実としてそうだからそうだという理由以外に理由があるに違いない——少なくとも、「はよや」だとか「xyz」だとかではいけないという、消極的な理由が。

「はよや」だとか「xyz」だとかは、全くデタラメな例としてあげたのだが、実は全く出鱈目なわけではない。それは、少なくとも次の2条件を満たす（ものと前提した）例としてあげているのだ。それは[1]同型異義と、[2]異型同義を避けるということだ。他の点を問わないとすれば、コンピュータや数学はこれだけを、——しかも、もっぱらそれだけを——記号＝「名辞」として要求する<sup>51</sup>。

人間にとって、このような記号が「名辞」にならない理由は明らかだ。それを見聞きしても、それと認知できないからだ。認知できないとはどういうことかと言え、それと「名辞の対応物」[図1参照]が関連付けられないからである<sup>52</sup>。

にもかかわらず、こうした状況に似たものは現実には生じる。例えば、私が、朝鮮語は全く分からないが、ハングルの文字だけは識別できるとしよう。さらに、仮りに朝鮮語の文法・統辞・意味論その他は日本語と寸分違わないものとしよう<sup>53</sup>。この場合、私は朝鮮語辞典を手元に置けば、ハングルで書いた文は読めるが、常に辞書を介してのみである<sup>54</sup>。このとき、私にとってのハングル文字の羅列は、記号列を前にしたコンピュータと、その限りでは、同列になるのだ。

日常のコミュニケーションではこの状態は実用性を持たない。だから、単なる記号でない「名辞」が基本単位となる。だが、これも説明としては不完全だ。なぜなら、例えば子供は、上述の歴史的経緯を全く知らずに社会化さ

れつつ言語を学ぶからだ。だから、もしも初めから彼らが、「はよや」だとか「xyz」だとかの「名辞」で教育されれば、それをマスターするだろうか。恐らくするだろう<sup>55</sup>。しかし、それは、非常に無理と無駄の多い、非効率的なものとして身に着くだろう。

今、「非効率」と言ったが、それはなぜだろうか。

上述のところで、名辞は全く論理的連結力を持たず、その力はおぼろげの含意のみから生ずるとして展開してきたのだが、それは必ずしも正しくなかったことがここで判明する。そのために必要な概念を更に明示していこう。

#### 注〔Ⅳ-1-1〕

<sup>51</sup> コンピュータはこれを「名辞」として受容する。そして、明かなことだが、コンピュータの演算は、これらの記号から何の含意も汲み取らない。反対に、含意を与えられて始めてそれを名辞として認知する（しかも、この場合の含意とは、命題を組み立てるための結合規則なのだが）。人間にとって、「はよや」だとか「xyz」だとかは、「記号」であって「名辞」ではない。だから、本論の問題の一つは、人間は名辞として何を要求するかの探求でもある。もちろん、これらの記号が歴史的に「牛」という名辞の位置を占めたケースはもう堂々巡りだから論じるに値しない。

<sup>52</sup> 名辞と、その名辞の対応物〔図1の①と②〕とを対応させるという場合も、実は簡単ではない。「牛」の場合にはむしろ具体的対応物〔同③——と言っても、〈牛〉のイメージだが〕と対応させて名辞を自分に納得させるだろう。しかし、抽象語（例えば「友情」）の対応物とはなんだろうか？ それはまさに「yuujou」という音をもつあの名辞に対応するモノ以外の何物でもないだろう。

ところで、ここにもう一つ重要な論点が浮かび上がる。つまり、人は名辞を名辞として認知するとき、その（〈記号＝名辞〉の内容としての）対応物ではなくて、むしろ現実の対応物を想い浮かべる方が容易であろうし、もしそうだとすれば、上述したように、それは、具体物であろうから、いわば、その名辞を最も劇的に代表するであろうような「代表的対応物」によって想い浮かべるのである。だから、「牛」という単語を聞いたときに想念に浮かぶ対応物は人様々なわけである。これは、例えばある単語を名辞として認知する場合も同じで、その単語を聞いたとき真っ先に何を連想するかは各自の勝手だが、そのとき想い浮かべた意味だけがその名辞と結びつくとは誰も考えない。その語の内包・外延については一致していてもその差は出るのだ。抽象名詞の場合には、これがもっと微妙な形になろう。

人は普通、名辞という記号表現によって何かを認知するとだけ考えるが、実はその前に、名辞自体を認知しなければならないのだ。

- <sup>53</sup> 筆者の生かじりの知識で言うところの90%ほどの一致のようである。
- <sup>54</sup> この例が一貫するためには、更に、私がそういうプロセスを幾ら反復しても決してハングル文字のままでは名辞として認識する能力を身に着けず、バイリンガルにならないことである。あらゆる仮定のうちで、この部分が最も非現実的である——人は、多少ともバイリンガルにならなければ、幾ら辞書があっても読めないのだ。
- <sup>55</sup> ハングルの例が出たついでに、いま少し言えば、韓国における国語教育はややそれに近い状況を示している。かの国語も基本的には「漢字かな混じり」文で、“かな”（この日本語自体が「仮名」は当て字で、朝鮮語の“가나다”[カナタ]から来た語のようだ）の部分はハングル文字が努める（日本の仮名よりはアルファベットに近いが機能は同じ）。ところが、現在の韓国の言語教育では、このうち、漢字の部分を抑圧する傾向にあるように思える（それも、中国よりは日本を意識した政策と聞く）。その結果、上記のハングルを前にしたコンピュータのような私の状況に似たものが現出する。日本では、漢字教育が正式に努力されていても容易でないのだから、ましてやそれを抑圧したらどうということになるか想像に難くない（商業紙ではそうでもないが、官公所系——例えば鉄道——や「北」の共和国、さらに私が訪れたある仏教系の有名私立大学の新聞や掲示では完全に漢字が締め出されていた）。現に、示唆的な例を二つ：韓国旅行の際、さる古刹〔佛国寺〕を訪ねたら、その漢字の看板に誤字があり、それを×印で消して訂正したのにお目に掛かった。いわば漢字の最後の砦である寺院でこの有り様だ。さらに最近、前大統領の名前の盧大愚の表記を間違った新聞があったと聞く。

最近の東京電機大学とNTTの共同研究によると『日本経済新聞』1996年1月8日、漢字の認識は仮名のそれより3倍の速度で行われるという。その訳は、仮名では①画像パターン認識、②音声化、③意味認識の段階を経るのに対し、漢字では②の段階をスキップできるからだという。

ついでに言えば、エスペラントの試みが成功とは言えないのもこのことと無関係ではあるまい（ただし、この言語は無意味な記号の羅列から成るがゆえに失敗したのではなく、人工的な基礎から覚えることの無駄が利いているのだ）。

#### IV-1-2 名辞間の繋がり の形式性と論理性

例えば、日本語の「苦み」と「にがり（苦塩、苦汁）」は当然関連した語だ。もちろんこれらをそれぞれ「はよや」と「xyz」に当てても記号表記としては何等支障は無い。だが、この二つが同根だということは、別のコンコーダンスを持たなければ失われ易い<sup>56</sup>。だから、名辞がそれ自体では繋がりを持たないとは限らないのだ。そして、その繋がりにはさしあたり音および/あるいは形なのだが、それは意味の繋がりも連想させる。そして、どの国語

もこの点では連想を容易にしている<sup>57</sup>。

このような名辞の間の繋がり論理性は、その含意の間の繋がりとは別なものだ——それが重なり合うのはいわば「偶然」ないし別なレベルの話なのだ。

それにしても、各名辞が含意を通じるのではなくて関係し合うという現象は概念として固定しておくに値するであろう。

#### (定義) 名辞間の繋がり形式性

名辞同士が、単にその外形(音韻/幾何学的その他の形態)によって互に関連を生じることがある。それが同時にそれぞれの分析的含意の間に関連をも含意することもしないこともある。

以上は、記号の形態的な(ただし、音韻形態まで含める)繋がりであった。そして、ここまで来て気付かれるだろうが、実は、これまで、名辞間の繋がりについて正式には触れないできたのだった。これまでは、ある一名辞の含意同士の繋がりについてだけ論じてきたのだった。だが、以下に述べるように、ある意味ではそれはもう済んでいるとも言えるのだ。そのことを顕在化させよう。

#### 注〔N-1-2〕

<sup>56</sup> 些細なようだが、新仮名遣いで、鶏の「1 わ」と「3 ば」は繋がり分らないが、旧仮名では「いちは(羽)」「さんは(羽)」で連絡は容易だ。

<sup>57</sup> 逆に言えば、これは語源俗解の温床になる。音の類似が意味の類似に採られ、また意味の類似は強引な音の修正を惹き起こす(私の田舎では、かつて「リアカー」→「荷ヤカー」と発音された: 次いでながら、ら行とな行の移行も朝鮮語=日本語の生理に入っているようだ(朝鮮語「盧」=[ro~no]; 「あられ」~(方言)「あなれ」)。ポルトガル語ではウクライナ(U-kraina < "U-[=outside of] the borders" [国境の彼方]) → 「ウクラニア(Ukrania)」と変形する。あの国語では国名は“-ia”で終わるのが自然だから)。

これもついでながら、哲学者もこれが十八番で、Heidegger や Nietzsche などはその愛好者のようだ。

### N-1-3 名辞間の繋がり論理性

繰り返すが、これまで展開したのは、ある名辞  $T$  とその含意  $\{T_{ij\dots w}\}$  の間の関係としての命題 [(式5)  $P_k^n(T_{ij\dots w}) = \{R_k(I_k(T_{ij\dots w}))\}$ ] であった。だが、これはおかしいのではなかろうか。というのは、命題はそもそも、単独の名辞の間ではなくて、複数の名辞の間の論理的関係のことではなかろうか？

だが、上述の議論は、この点に関してそれほどの遺漏ではないことはこれから以下で説明する通りである。

## N-2 命題の定義再考——複数名辞間の関係

### N-2-1 蜀山人の例

例えば、蜀山人だか誰だかの狂歌にこんなのがあった——

「佐保姫が蕨の腕を振りあげて山の横面はる（春/張る）風ぞ吹く  
（さほひめがわらびのうでをふりあげてやまのよこつらはるかぜぞふく）」

これを、「主文」だけとって、

「佐保姫が山の横面を張る」

という文にしよう。これは明らかに、主体（主語）としての「佐保姫」と客体（客語）としての「山」を含む命題だ。

これまでの命題の定義では、名辞の定義文＝陳述のみを扱ってきた。だが、この文は、ざっと眺めても、次のような特徴を持つ。

- [1] 主客に分かれた文。従って出発点に二つの名辞を含む；
- [2] 主客の名詞だけでなく、動詞を含む；
- [3] 主客いずれの定義でもなく、そのいわば偶発的な関係を述べている

(客体が「山」であることも、その客体を「張る」という行為も、「佐保姫」にとっては偶発的である)；

- [4] (この場合の主語は神話の人物「春の女神」だから問題が回避されているが、それでも) 誰であれ、普通は不可能な「山の横面を張る」という、また「山」が「横面」を持っているという、不合理ないし非現実的な内容が含まれる。

#### IV-2-2 動詞・形容詞等の扱い

まず、名辞が名詞以外を含むこと(上記[2])については、ここでは正面から取り組まず、いわば「逃げ」をうって、以下のような便法で処理しておく(本論の関心がそこにはないからだ)。その他、日本語の助詞その他については触れることさえしないでおこう。

その便法とは、次のようなものだ：

(動 詞) [例]「張る」→「張る(殴る) こと(という動作)を持つ」

(形容詞) [例]「赤い」→「赤さを持つ」

(「を持つ」という動詞は無視する<sup>58</sup>。)

これはいかにも気まぐれな処理のようだが、それは一見して感じられるほどではないのだ。ここでの問題は、むしろ、この処理の問題ではなくて、そこに出てくる語(動詞とか形容詞とか)と主体(主語)ないし客体の名辞との繋がりが偶発的だということだ。

だから、例えば「犬」という名辞  $T$  にとっての「含意」として  $T_1$  = 「4 脚」をあげた場合、

「 $T_1 \in T$ 」は実は「 $T$  は  $T_1$  だ [ $T_1$  を持つ]」

ということだと読み代えても、それ程の違和感は無いはずだ。この  $T_1$  = 「4 脚」は  $T$  にとって十分に必然的・論理的・分析的・内在的だから、それが動詞構文の省略形だという点は気にならないのだ。

58 これをさらに別の名詞構文にすることは可能かもしれないが、ここであまり捻ってみても始まらないだろう（例えば、[和辻，第一章四] 参照）。

### N-2-3 2つの名辞間の関係

これまでの命題の定義は以下のようなものであった<sup>59</sup>：

$$(式3) \quad [\text{第1階の命題}] \quad P_k(T) = \{R_k^n(I_k(T))\}$$

ポイントは、ここに参加する各含意は名辞  $T$  のみに関するものであるということだ。だから、もしも上の例のように、二つの名辞を含んだ文をこの形で処理しようと思えば、どうしても、「佐保姫」と「山」を別々のものとしてではなく、両者が合体したの〈「佐保姫」-「山」〉システムのようなものを考え、この〈システム〉を  $T$  という名辞で表すことになる。そして、この〈システム〉の部分＝「含意」としての「佐保姫」( $T_1$ )と「山」( $T_2$ )とがそれぞれの「含意」( $T_{11}$ ＝「張る」と  $T_{21}$ ＝「横面」)を経て命題が完成する：

$$\text{「佐保姫が横面を張る」} = R(\{T_{12}, T_{21}\})$$

すると、名辞  $T$  は、この命題によって成り立っているところの〈システム〉に付けた名称ということになる。これはしかし、いかにも無理がある。というのも、「佐保姫」も「山」も、もっぱらこの〈システム〉を成立させるために在るものではなく、これは偶発的な〈システム〉になるからだ<sup>60</sup>。

だから、この取扱いのためには、やはり、一つの名辞でなく、二つの名辞を設定して始める方が自然であろう。その点を簡略にスケッチしよう。

(定義) 2つの名辞間の関係を表す命題

二つの名辞  $T$  と  $U$  があって、その (第1階の) 含意を  $I(T), I(U)$  とするとき、その中に、含意  $T_i \in I(T)$ 、と  $U_j \in I(U)$  があって、それらの関係として命題が完成する：

$$R(\{T_i, U_j\})$$

上記の例では、二つの名辞  $T$  (「佐保姫」) と  $U$  (「山」) があって、その (第1階の) 含意を  $I(T), I(U)$  とするとき、その中に、含意  $T_1$  = 「張る」  $\in I(T)$  と、 $U_1$  = 「横面」  $\in I(U)$  があって、それらの関係として命題が完成する：

$$\text{「佐保姫が横面を張る」} = R(\{T_1, U_1\})$$

これは、これまでの展開と根本的に異なるような外観を呈するかもしれない。だが、すぐ後に述べるように、ここでも、本来の問題は関係の非合理性 (上述[3][4]) の方であって、出発点の名辞の複数性の問題ではない。

というのは、以前の命題の定式化は、出発点こそ単独の名辞  $T$  であったが、その含意を1階下がれば、以下は複数の名辞の間の論理的关系の問題になるからである。ここでは、含意に関する階層構造のイメージが欺き易いのだ<sup>61</sup>。その点を以下で説明しよう。

#### 注 [N-2-3]

<sup>59</sup> ここで、「命題」という名で、偶発的な関係や行為・属性をも含むのかという点 (上記[3][4]) は、後に肯定的に処理するという点だけを述べて、以下に送っておく。

<sup>60</sup> 偶発的な〈システム〉があってもよいし、それに一過的な名をつけても悪いことはないだろうが。

逆に、以上の方法は〈システム〉が構成される際の記述には使えることになる。

なお、これは、「命題としての名辞」の問題に関連するが、十分に論じる余裕は



- <sup>61</sup> これはちょうど、ある関数  $y=F(x)$  を見せて、「これは第何階の微分か？」と問うのと同じく「形而上学的」な問いである。上の例でも、 $T=\langle \text{「佐保姫」}-\text{「山」} \rangle$  のレベルで問題が始まったと見なさずに、 $T_1$  と  $T_2$  のレベルで始めたと考えればよいのだ。しかし、これから述べることはそれ以上のことを言っている。

### IV-3 階層性=ツリー構造の偽り：「リゾーム」？

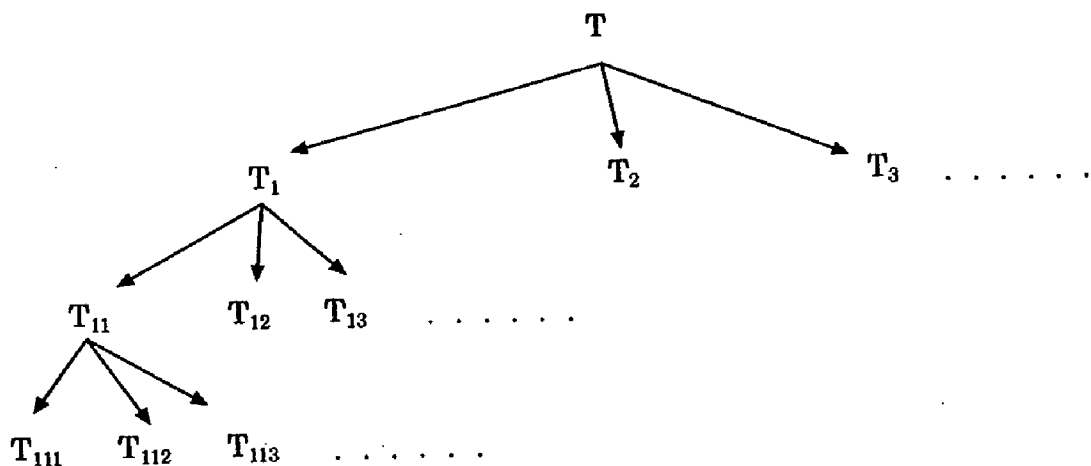
含意の階層構造は、一種のツリー構造に見える。だが、実際には必ずしもそうではない。

例えば、ある名辞  $T$  の第1階の含意が  $T_1, T_2, T_3, \dots$  で、さらに第2階のそれが

$$I(T_1)=\{T_{11}, T_{12}, T_{13}, \dots\}; I(T_2)=\{T_{21}, T_{22}, T_{23}, \dots\}; I(T_3)=\{T_{31}, T_{32}, T_{33}, \dots\}; \dots$$

となり、さらに第3階以下も続くとすると、これは例えば次の図のようなイメージが湧く [図3]。

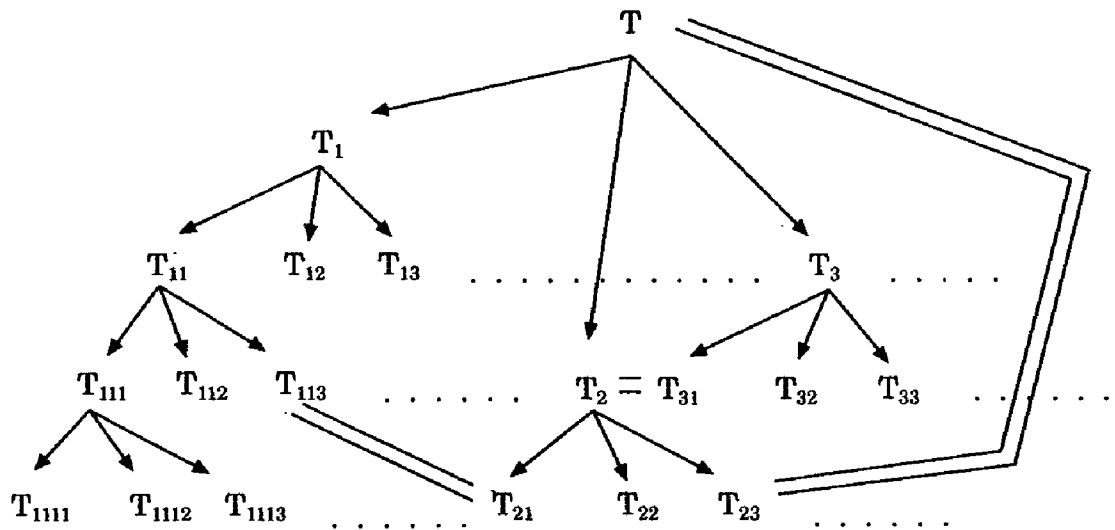
図3 ツリー構造



しかし実際には、現実の階層が互いに「横並び」になるという保証も基準もない。しかも、各名辞は、階数に関わらず同じ語彙に属する、それ自体何ら階層性の無い単語である[(式1)  $T_{i \dots w} \in W$ ]。従って、全体図は一種の「リゾーム」<sup>62</sup>状態を示す。単なるイメージに過ぎないが、それを図示してみよ

う [図4]。

図4 「リゾーム」?



(凡例)  $\equiv$  は同じ名辞であることを示す

特に注意すべきだが、上述のように、名辞およびその含意を構成するのは、階数が異なっても、語としては何らメタのレベルを構成しない、同じレベルの単語なのである<sup>63</sup>:

(式1)  $T \in W$

(式2)  $T_1, T_2, T_3, \dots \in W;$

あるいは,

次に、上述の問題[3][4]、つまり、名辞間の偶発的結合も、命題、つまり分析的含意の間の関係に関する陳述として扱うことができるかという問題に移ろう。

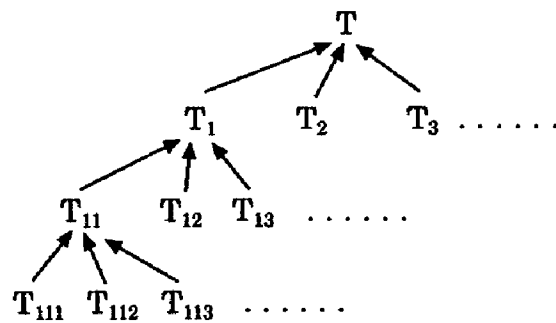
注 [N-3]

<sup>62</sup> [ドゥルーズ/ガタリ, 1994]

<sup>63</sup> 上注34も参照。それに対して、人工言語は、多分、階層の上に上る(深まる)に

つれて、下位の名辞の含意の間の関係自体に名辞が割り振られ、その名辞は下位の語彙には含まれないようになっていく、というふうになっているであろう。つまり、一般に、語彙  $W$  が階層化されていて、 $W_1, W_2, W_3, \dots$  となっており、もしも、 $i < j$  ならば、 $W_j$  の語彙  $x$  は  $W_i$  には含まれない、すなわち、 $x(\in W_i) \notin W_j$ 、つまり、 $W_i \cap W_j = \emptyset$  である。ただし、この場合には、いわば「逆ツリー」状になり、ある名辞  $T$  が構成される、ないしは発生する順序に下位の名辞が吸収されていく様を描くことになるだろう。[図5]

図5 逆ツリー構造



#### N-4 名辞間の「非合理的」関連

上述の例[3][4]では、含意の間の偶発的な関連の例として2つあげた：

- [3] 名辞  $T$  の（というよりは、その現実的対象  $\langle T \rangle$  が念頭に置かれてこの議論が生じることが多いだろうが）、その分析的な性質ではなく、そのいわば偶発的な状態・行動などについて述べる場合もそれを「含意」の間の論理的関係と呼べるのか？

客体が「山」であることも、その客体を「張る」という行為も、「佐保姫」にとっては偶発的である；

- [4] 誰であれ、普通は不可能な「山の横面を張る」という、また「山」が「張られ」得る「横面」を持っているという、不合理ないし非現実的な内容が含まれる。これらをも「分析的」含意と呼べるのか？

大体こうした問題であった。つまり、このような偶発的、ないし非合理的な

結合が分析的・論理的等の名に値いするかという問題であった。

こうした問題を考えるとき、次のような概念を打ち建てたい誘惑に駆られるだろう。

(定義) 名辞の間の可関連性 (relationalizability)?

(簡単化のため、以下では1階の含意だけに話しをとどめる)

$T_i, U_j$  が名辞  $T, U$  の含意である、すなわち、 $T_i \in I(T), U_j \in I(U)$

であるとして、この2つが何らかの仕方で関連付けられるとき、すなわち、

$$r(T_i, U_j)$$

のとき、二つの名辞  $T$  と  $U$  は、関連可能である。

もちろん、これはただの同義反復であって、何も実質的なことは語っていない。

例えば、最も簡単な  $r(T_i, U_j)$  の例は、 $T_i = U_j$  のケースであろう。その他、上述の「佐保姫が山の横面を張る」場合で、 $T_i =$ 「横面を張る」で、 $U_j =$ 「横面を張られる」でもよい。

以上は、これまで展開してきたこと以上のことは何も述べておらず、この場合も、言語のレベルで考えている限り、全く何の制約も無いことがわかる。現に、上記蜀山人だかの狂歌をわれわれはちゃんと鑑賞し、かつ楽しんでいるのだ。つまり、言語だけの世界では何事も可能なのだ<sup>64</sup>。だから、結局、名辞とその対応物 [図1①②] の世界に閉じ込める限り、不毛なのだという、性急な反省が生まれるかもしれない。それにしても、その問題を少し考えてみる必要はあろう。

注 [IV-4]

<sup>64</sup> 残るのはトリヴィアルな制約、つまり形式論理上の矛盾を犯さないことぐらいになる。それすら、例えば「色即是空」のレベルになると、別な意味付けが与えられたりする。

## Ⅳ-5 名辞と対象

これまでの展開は、名辞の含意が形式的に分析的で所与の場合、それから造られた命題が許容されるか、ということの問題にしてきた。これは、そもそもの出発点であった、発話の統制のうちの、言語の自己展開に関するものであった〔図2〕。そして、その統制力は、予想通り、広過ぎるようである。というのは、これは、展開してしまったものはほとんど無制約に受け容れるということに等しいからだ——それはそれで検討の成果として得られた結果であるが。

だが、逆に、発話の統制の主力を対象に仰いだ場合にも、言語は為す術なしに、ただ得られた結果を何でも易々諾々と受け容れるだけなのか、あるいはそれ相当の制約を課するものなのか？ あるいは逆に、言語は結局、対象 referents〔図1③〕無しには一人立ちできないのだろうか？

## Ⅳ-6 指示詞としての主語

まず、次の概念を定義しておく。

(定義) 主語による命題の支配

発話(命題)が完全(純粹/実質的)に分析的であれば、すなわち、その主語の述部が完全にはその名辞の含意からは成っていれば、そのとき、その主語たる自然名辞はその命題を完全に支配している。

上述の「佐保姫が横面を張る」話しはそうでない例になる。つまり、上の定義の逆は主語たる自然名辞がその命題を完全には支配していない場合になる。ただし、上の例は、客語の行動が主語から必然的には出て来ないという意味でそうなのだ。それに対して、同じ行動でも、例えば「犬が吠えた」という文は、名辞「犬」の referent である〈犬〉を連想すれば、かなりの程度「論理的」「必然的」な文になる。つまり、主語の支配がかなりなものだ

ということなのである。

それでは、そうした支配の一番及ばないのはどういう名辞か？ その極致は固有名詞である。

#### N-6-1 固有名詞<sup>65</sup>

主語が命題を支配しないということが最も極端になった場合、つまり、主語が全く命題を支配しない場合、その時、その主語は、その名辞が refer する（その referent である/として持つ）実体に対して、いわば「固有名詞」になる。例えば、ある男性の「太郎」、女性の「花子」という名前はその referent について何事も語らない<sup>66</sup>。それは、単に「*x*」とか「*h*」とか呼ぶのと変わりはない。つまり、「あのモノ」「このモノ」と言うのと変わらない。従って、それは、例えば「*a*」「*b*」「*c*」…とか「*a*」「*i*」「*u*」…、ないし「*a* *a*」「*b* *i*」「*c* *u*」…等々の記号を割り振るのと変わりはない。そして、こうした（無意味な）記号は、可能性としては無限に実現し得る。従って、識別の困難は生じない。識別の困難とは、同じ referent が（意図しないのに）同一の記号で呼ばれること〔異名同義〕および/あるいは幾つかの referent が同一の記号で呼ばれること〔同名異義〕である。

対象が（それ自体無意味な）記号で呼ばれる場合の主な問題は、上述のように、原理的な識別の困難〔混同〕でなくて、もっと人間的なものである。つまり、原理的識別の困難ないし不可能性ではなく、むしろ、人間による識別（認知）の困難ないし不可能性である。むしろ、記銘の困難とすべきかもしれない。無意味な記号はそれ自体では意味不明であるから、記銘が困難であり、したがってそこから人間による識別の困難が生じる。それに対して、名辞が自然語からなる場合には、人はいわば「それ自体として」了解し、かつ識別し、かつ記銘できる。

他方、主語が部分的にであれ命題を支配する場合は、主語は単なる指示詞ではない。例えば、「犬」が主語になった場合には、この語は、referent と

しての生物学的実体の属性を表す名辞を含意として持つから、その限りにおいてではないが、その関連でも、形式的に分析的命題を産出し得る。前者の場合は、対象による統制が利いて完全に自己展開は出来ないという意味では自由ではありえない。例えば、「犬は母の子宮から出てきて、母乳で育つ」という文は、完全に分析的で真であるが、「この犬は羽がある」という文は違法である。他方、「あの犬は白い」という文は、真偽が分析的には確定できない。しかし、それは対象による統制という面からのみ言えるのであって、言語自体の自己展開の面からは、形式的に全く「合法」なものである。

#### 注〔N-6-1〕

<sup>65</sup> これは勿論、上述〔N-1-1〕の記号の恣意性に関する議論と並行するものだ。

序でに述べておくが、あらゆる名称は固有名詞化しがちである。例えば、化学では原子に色々な名が付くが、これは、純学術的見地からは無意味な、ただの文学的・歴史的なもので、本当は原子番号だけで特定出来るのに、それにストロンチウム等々の「あだ名」が付く。これはもちろん、人間にとっての識別の容易さのためだ（上記N-1-1; [長尾, 1987] 参照）。微妙な話したが、命名が非論理的な場合が多いのもこのことと関係がある。例えば“Post-Impressionist”を日本語では「後期印象派」と訳すが、厳密には誤りで（これだと、印象派の中の一区分ということになる——但し、そういう意味も含まれているという点では原語も *misnomer* なのだが）、「〈印象派〉後-期の」（あるいは「後-〈印象派〉期の」の意味である。しかし誰もそんなことは気にしないのは、それはちょうど、弱虫に「勝太郎」という名が付いても誰も「矛盾」を云々しないのと同様だ。それは人間が即座に識別出来る符丁であれば事足りるからだ。因みに、“post-industrial”（「〈産（工）業〉後-期の」の意）には「脱産（工）業化」という名訳があり、“post-modern”はカタカナで逃がっている。

<sup>66</sup> ただし、例えば「太郎」は日本男子の名だという、普通名詞的情報からは色々な含意が滲み出すだろうが。

## V 応用

以下では、以上のような展開が、特に「文化科学」の研究に対して持ち得る幾つかの含意を考察してみたい。

### V-1 「見解の相違」について

分野を問わず研究とは各自の発見/見解を提示し、それを他者に説得して、「客観的」なものとして認知してもらう活動である。この場合、究極目標としては、客観的対象を把握し、それを主として言語で記述して表現し、その言語表現としての妥当性を追及するものであるから、主として言語活動である<sup>67</sup>。しかも、その表現の「正しさ」ないし「真理値」、つまりその言語表現と対象との一致が求められる、優れて「記述言語」の世界である。

しかし本論は、この言語表現と現実対象の一致それ自体の話ではなく、それが一致するための、言語の側の、必要条件を述べるものである（十分条件は、それに加えて、本来の研究の問題——観測・測定のそれに到るまで——の解決を含まなければならない）。

そこで、ここでは、各自が得たと考えるものを言語表現し、それを相手に伝えて説得する場合に成立しているはずの言語的状况を記述したい。それは逆に言えば、コミュニケーションが成立しない条件、あるいは、以下に述べるように、成立したと考えられるのに、客観的には成立していない場合（それは非常に多い、むしろ常態であろう）等々を明らかにするのだ。当然ながら、そうした条件と、本論のテーマである自然/人工言語の区別の問題が問題になる。

まず、言語表現としての合意の状况を検討しなければならない。



注〔V-1〕

<sup>67</sup> この場合、後にも述べるように〔後注69参照〕、言語表現の他に確固とした対象が外にあって、それと言語表現を対照すればよい、というほど事態は単純ではない。かえって、現実の把握はこの言語表現に頼っていさえいるのだ。その意味で、テキストのみが唯一の現実だという文学の世界と研究活動はそれほど隔たったところにある訳ではないのだ。

V-1-1 「見解の一致」とは何か

初めに、以下の議論のために「理論」という用語の定義を与えておく。

(定義) 理論 (theory) ないし仮説 (hypothesis)  $H$ <sup>68</sup>

名辞  $T$  についての命題で、それが対象  $\langle T \rangle$  に関して妥当する記述として提示されるものは、 $\langle T \rangle$  に関する理論  $H(\langle T \rangle)$  である。

この場合、理論がそれと対比されてその真理値が検証されるものは対象 referent  $\langle T \rangle$  であるように思われるかもしれないが（そう言うしかないのも事実だが）、そうではない——少なくともストレートにそうとは言い得ない。というのは、他ならぬこの  $\langle T \rangle$  を表現しようとするのが理論なのであり、それ以外のものではない。つまり、理論は、それ自体としては比べるものが無いのだ<sup>69</sup>。比べる相手のもの ( $\langle T \rangle$ ) を確定すべく努力すれば、その成果である言語表現も理論の内部に取り込まれてしまうだけなのだ。

注〔V-1-1〕

<sup>68</sup> 理論と仮説はここでは区別しない——まだ検証されない理論が仮説だ、云々の議論がありえる。しかし、最終的に検証された理論という論理的身分があるものかどうかさえ筆者は知らない。いずれにしても、以下の議論では、むしろ仮説の意味でのみ理論という名辞を使う（けだし、その内容の合意が問題になっているのだから）。

<sup>69</sup> ここから、あの実証主義のやや奇妙な説が説明される。それによれば、理論そのものが現実と似ているかどうかはどうでも良い。ただ、理論の正しさは、その理論

の生み出す予測の的の中にあり、とするものだ。われわれの展開からしても、これにはかなり頷ける点がある。ただ、この主張の問題点は、理論が「似て」いるかどうかを語ること自体が無意味であることを忘れているということだ。もしもそれが語れるならば、「似ている」方が良いに決まっているし、そしてまた、「本当に」似ているなら、それ自体、予測力も備えていることだろうから。

それにしても、以上のように言った場合に残る違和感はどこから来るのであろうか。例えば、これが言語でなくて、視覚情報、例えば絵画なら、作品がモデルとしての対象と似ている/似ていないを容易に語るのだ（尤も、ピカソはともかく、カンディンスキーのようになるとどうだろう？ 音楽は？）。尤も、絵画は、必ずしも「似ている」ことを求めるものではないが（つまり、「記述」が主眼ではない？）、理論は何らかの意味で似ていなくてはならないのだ。

### V-1-2 「見解の一致」状況

以上の準備をした上で、人が、言語表現としての理論について合意するとはどういうことかを検討しよう。

二人の研究者がいて、両者が「見解」つまり理論の一致をみるというためには次のような状況が揃っていなければならない。

（見解の一致状況）

- [1] 研究対象となる現実の特定
- [2] 名辞の設定
- [3] 含意集合の設定
- [4] 理論の特定
- [5] 検証方法とその結果についての合意

以下でこれらの各々について検討していく（ただし、[5]は今は検討から外す）。

### V-1-3 「対象の一致」——[1]対象の特定と[2]名辞の設定

研究主体  $K, L$  がいる。両者はまず、何を研究し、何について理論を造る

かについて合意しなければならない。その場合、両者はその対象に名辞を与えるのだが、まず<sup>70</sup>、その点で一致しなければならない。すなわち、ある  $T$  という名辞を持つ  $\langle T \rangle$  というものが研究の対象であることに合意するわけである。しかし、それに合意するとき、両者は同じ名辞を使うとは限らない。それはある意味でどうしてもよい「固有名詞」であるからで、実際には研究者  $K$  と  $L$  がそれぞれ  $T_K$  と  $T_L$  という名辞を名称とすることがあっても良い。しかし、その場合にも、両者が同じものを指すのだという合意は要る。それを形式的に示せば、以下のようになる：

(定義) 名辞の相等

名辞  $T$  と  $U$  はその名辞の参照対象が等しい、つまり  $\langle T \rangle = \langle U \rangle$  のとき<sup>71</sup>、名辞として相等で、それを次のように書くことにする： $T \sim U$

つまり、この場合、 $K, L$  両者は、研究対象とその名辞について一致する、

すなわち  $T_K \sim T_L$ ,

つまり  $\langle T_K \rangle = \langle T_L \rangle$

である<sup>72</sup>。

注〔V-1-3〕

<sup>70</sup> ここでは、時間的ないし手続きの順序を問題にしている訳ではない。実際は逆の順序で生じることも多々あるだろう。

<sup>71</sup> 実は、客観的に等しいか、ないしは相い等しいか、どうかは問題なのでなく、両者がそうだと信じればよいのだ。この点はいちいち断らずにおく。

<sup>72</sup> 前注64と関連するが、このような命名自体はそれほど重要ではないし、また名辞について合意するのは、むしろその内容、つまりそれについての理論が合意されて始めて可能になることが多いであろう。

## V-1-4 「理論の一致」——[3]含意集合と[4]理論の合致

いよいよ本来の目標である理論についての合致に入る。理論とは要するに名辞  $T$  に対応すると考えられる対象  $\langle T \rangle$  に関する命題のことであったから、それが両方で合意に達するには、前提として、その名辞に関する含意について合意していなければならない。

以前に、含意集合は、およそ可能な語彙の集合  $W$  のうちで、relevant な部分  $W'$  から選ばれると述べた：

$$(式 2') \quad T_1, T_2, T_3, \dots \in W' \subset W$$

ここでの問題との関連で言えば、この  $W'$  は当該の理論にとって relevant な部分  $W^T$  ということになる。ここで研究者  $K$  と  $L$  がいて、それぞれが自分で relevant だと思う含意の集合が出来る：

(理論関連含意集合)

対象  $\langle T \rangle$  の理論にとって relevant と当事者  $K, L$  が考える、 $T$  の含意の集合：

$$W_K^T, W_L^T$$

そこで、理論が一致するためには、この両者が合致しなければならない：

(含意集合の合致)  $W_K^T = W_L^T$

もうひとつの条件は、当然ながら、合致した含意の上に建てられる肝心の理論が一致することである。両者が造る理論は、

$$(式 3) \quad P_K(T) = \{R_K^n(I_K(T))\}; P_L(T) = \{R_L^n(I_L(T))\}$$

そして、理論が合致するとは  $P_K(T) = P_L(T)$

となることである。

以上で見たように、「理論の一致」の条件は極めてトリヴィアルな外観を呈する。要するに、両当事者で、含意も、それに関して打ち建てられる命題

も同じならば合致する，というだけのことだ。

だが，これではほとんど言うに足りない結論だろう。なぜそうなのだろうか？ それは，そういう合致が極めて難しいことを述べていないからだ。つまり，ネガティブに，合致を阻む条件を展開しないからだ。そこで，次に，そうした条件，つまり合致を阻むネガティブな諸状況をポジティブに述べることを試みよう。

#### V-1-5 「理論の不一致」の条件

以上は，理論が一致しているときに成立している状況を述べたものだった。そして，それ以外の場合には，要するに合致はないのだ。しかし，どういう状況でその合致が得られないかをポジティブに言うことは必ずしも容易でも，あるいは稔り豊かでも，ないだろう。なぜなら，一致状況は一つだが，不一致状況は無数だろうからだ。

にも関わらず，以下では敢えてその「不一致の条件」の中でも重要と思われるものをポジティブに述べてみようと思う。重要という基準は何かと言うと，それが研究の現場で重要な帰結とともによく生じ得るものであり，そして，それは同時に，自然言語という媒体を用いて行われる活動に本質的なものだ，という基準である。

不一致は，上記の[1]～[4]（および[5]）のいずれからでも生じ得るのだが，ここでは特に，[3]含意集合の設定，および[4]理論の特定に関して典型的に生じる状況を指摘してみたい。

#### V-1-6 [3]含意集合の設定の不一致

この場合は，要するに，次のように不一致が生じていることなのだ。  
(含意集合の不一致)

$$W_K^T, \neq W_L^T$$

なぜ不一致になるかと一般に訊いても無意味であろうから、ここではその典型的な状況を述べる。

このような不一致が起こる理由の一つは、含意集合が部分的に一致するが、完全には一致しない場合だ。つまり、それぞれの含意集合が一致する部分と一致しない部分を含んでいる場合だ。すなわち、

(含意集合の部分的不一致)

両者の含意集合が2つの部分から成っていて：

$$W_K^T = W_K^T(1) + W_K^T(2); W_L^T = W_L^T(1) + W_L^T(2)$$

となっており、そのうち、前半部については一致するが<sup>73</sup>,

$$W_K^T(1) = W_L^T(2),$$

しかし、後半部は一致せず、

$$W_K^T(2) \neq W_L^T(2)$$

という状況になっている場合である。

だが、このような場合であっても、その故に理論の不一致が生じない場合がある。それは、 $W_K^T(2)$ と $W_L^T(2)$ が理論形成にとって relevant でないばかりだ。つまり、

理論

$$[(\text{式3})] \quad P_K(T) = \{R_K^n(I_K(T))\}; P_L(T) = \{R_L^n(I_L(T))\}$$

に参加する含意はもっぱら  $W_K^T(1)$ と $W_L^T(1)$ のみに関わり、

$$(\text{式2}') \quad T_{K1}, T_{K2}, T_{K3}, \dots \in W_K^T(1); T_{L1}, T_{L2}, T_{L3}, \dots \in W_L^T(1)$$

であるが、 $W_K^T(2) \neq W_L^T(2)$ にはかかわらず、

$$T_{K1}, T_{K2}, T_{K3}, \dots \in W_K^T(2);$$

および

$$T_{L1}, T_{L2}, T_{L3}, \dots \notin W_L^T(2)$$

である場合である。

だが、以上のケースはルール違反だ。というのは、仮定により、 $W_K^T$ と

$W_L^T$  の全体が relevant だとして議論を始めたのだから、 $W_K^T(2)$  や  $W_L^T(2)$  のような irrelevant な部分が存在する余地はないのだ。そして、何より、今はそのようなトリヴィアルなケースに関わっている余裕はない。それより遥かに重大で、本論の主張に正面から関わるケースがあるのだ。

注〔V-1-6〕

<sup>73</sup> これは、いわば数学的トリックの手法であって、一致する部分だけ集めてそれぞれ  $W_K^T(1)$  および  $W_L^T(1)$  と表記したと考えてよい面もある。しかし、そういう部分だけを集めて「合致集合」を造る第三者がいるように考えれば誤謬だ。ここはあくまでも、当事者としては  $K$  と  $L$  しかないのだ。

V-1-7 無意識的含意のケース

やはり、relevant な含意を、以前と同様、各々二つの部分に分ける。すなわち：

$$W_K^T = W_K^T(1) + W_K^T(2); W_L^T = W_L^T(1) + W_L^T(2)$$

となっていて、そのうち前半部については両者が一致する：

$$W_K^T(1) = W_L^T(1)。$$

しかし、後半部 [ $W_K^T(2)$ ,  $W_L^T(2)$ ] については別な状況にある。その説明のために必要な概念は次のものだ。

(定義) 無意識的含意

ある含意の集合  $W$  が、relevant である<sup>74</sup>、つまり、命題の構築に参加しているが、そのことが発話者および/あるいは受話者に意識されていないとき、この含意は「無意識的含意 (unconscious implications)」である。

この概念を使うと、上の議論は次のように継続できる。それは、発話者/受話者  $K, L$  が、それとは意識していないが、命題の作成にそれぞれ含意集合  $W_K^T(2)$ ,  $W_L^T(2)$  を動員しているような状況だ<sup>75</sup>。

このことは、単に、数在る誤謬のうちの一つ以上でも以下でもない、といったものだろうか？ そうではないと考えるべきで、それどころか、これは、上記〔Ⅲ-1〕のように定義した自然言語を用いての理論的操作においては、ほとんど避け得ないものだと考える。その点を印象深く述べるために、次の「定理」（ということは、仮説だが）を建てておこう。

（定理）無意識的含意の排除不可能性定理（Theorem of Unavoidability of Unconscious Implications）

詳しく言えば、「自然言語における命題作成における、relevant な含意の排除不可能性定理」ということになる。

注〔V-1-7〕

<sup>74</sup> relevant でない含意については、もともと問題にしなくて良いから、意識的/無意識的の区別も無用である。

<sup>75</sup> この場合も、互いに自分については無意識で、相手が一部の含意を無意識に使っていることには気付いている、等々、色々な組み合わせがある。さらに、無意識の一種とすべきか、あるいは別のカテゴリーなのか分からないが、含意が relevant であるのに明示されないというケースが加わろう。これらの問題の詳細は略す。

V-1-8 [4]理論の特定の不一致

理論の不一致の源泉としての、「演算」 $R_K, R_L$  そのものについても無数に原因や理由があるだろうが、ここでは、とりたててポジティブに言うべきことはあまりない。むしろ、上記[3]の系論として、つまり、異なった含意の含意（上記無意識的含意の働きの無視）に基づいて生じる結果を特筆しておくにとどめる。この場合、どうしてそのような無意識という遺漏が可能かと言えば、「演算」 $R_K, R_L$  そのものが曖昧に進行する結果、そうした前提に関する不一致が明白にならず、またそのことがいっそう「演算」の曖昧さを助長するという悪循環が生じるからであろう。



この点についてはこれまでにして、以下では、それを総括する意味で、自然言語による理論活動の問題点を整理しておこう。

## V-2 文化科学と/の理論

### V-2-1 自然言語と人工言語における含意と命題の生成

数学と自然科学等を一括して古風に「厳密科学」と呼び、それ以外の分野を（リッケルトに従って）「文化科学」と呼んで、ある種の単純な対置関係において議論することにしよう。

文化科学では、理論は、自然言語を加工して（用法の限定・拡張、造語等々）、理論言語という疑似人工言語（quasi-artificial language）として限定して使用する必要がある。ここに総ての問題の発端がある。

人工言語では、名辞の選択がすでに「演算」 $R_k$  そのもの、 $R_k$  の構成を前提とする。数学では、名辞はいわばこの  $R_k$  の要素としての身分によって、その含意を得る（名辞自体は「固有名詞」である）。Relevant な含意  $I_k(T)$  等々の限定は  $R_k$  の枠内でなされる。すなわち、人工言語においては、

$$R_k \rightarrow \{I_k(T)\} \text{ の選択} \quad (1)$$

の方向で命題と含意が関係する。これと対照的に、自然言語においては、

$$\{I_k(T)\} \text{ の選択} \rightarrow R_k \quad (2)$$

しかし、（程度の差はあれ）理論活動においては（あるいは、一般に意味ある陳述においては）、(1)の精神で行われる。つまり、人工言語のアナロジーで、あるいはそれを「模範」として行われる。ただ、その絞り込みが決して一義的に規定できない。その努力がなされることはあるが、決して成功しないし（自然言語の無尽蔵性定理/無意識的含意の排除不可能性定理）、話者が完全に意識し、また、それが聞き手（受話者）に理解・合意されるとい

うようなことはまず無い。

従って、自然言語によるコミュニケーションは決して相互了解が（客観的に見て）成立することはない。

## V-2-2 「列挙法」と「自然名辞賦与法」

例えば、 $X$  という、文字通り全く含意を持たない、単なる記号を置いておき、次にその含意を指定する。その方法は2つある。

（列挙法）

例えば、以下のような列挙法で与えることができる：

〔例〕  $I(X) = \{A \text{ [知能を持つ]}, B \text{ [意識を持つ]}, C \text{ [2足歩行]}, \dots\}$

および、含意の濃度は

$$N(I(X)) < \infty \quad [1]$$

とする<sup>76</sup>。つまり、 $X$  とは、「 $I(X)$  として列挙するような<sup>77</sup>含意を持つもの」であるとしている。

（自然名辞賦与法）

他方では記号  $X$  を置き、それに直接に自然言語の名辞を対応させる、例えば、

〔例〕  $X = \text{人間}; \quad \therefore N(I(X)) = \infty^{78} \quad [2]$

とすることもできる。

この両者では、事態が根本的に異なる。

だが、そもそも[1]の方法による指定でも、これは「人間」に係わるものがほとんど自明のこととして「了解」され、したがって、直ちに[2]の形に持ち込まれる。「文化科学」——人文・社会科学——ではそれは不可避である。

つまり、人文・社会科学では、[1]の精神/ないし「積みり」で提示され、

実際上は[2]が実施される。それは数学以外では不可避であろう。

その結果として、文化科学は、科学としてどういう影響を受けるか？「欠陥」か、「長所」か？「欠陥」だとしたら、改善の余地はあるか？「長所」だとしたら、それはどこに存するか？それは促進できるのか？

恐らく、「欠陥」も「長所」もあろうが、そもそも、それは不可避でなのであるから、善悪をあげつらっても無意味だ。そして、この不可避かつ唯一の様式でこれまで文化科学が成果をあげて来たとするれば、それは非常な長所を持つとしなければならないだろう。だが、——繰り返すが——これ以外に方法は無いのだ。

欠陥は、次のような問題が生じることだ——つまり、上述のように、実際にコミュニケーションが成立していない（完全には出来ない）のに成立したと思ひ込むこと、あるいは、発話者自身が自己欺瞞に陥ること、あるいは、（これは「長所」に数えられると思うが）陳述はいつでも発話者の意図以上の含意を（常に「正しい」とは限らない含意を）持つこと<sup>79</sup>、等々だ。重要なことは、これらの問題というより、事の事態に目覚めて、それを念頭から放さないことだ。

もう一つ、応用例と考えられるものを検討して本論を終わることにする。

#### 注〔V-2-2〕

<sup>76</sup> 濃度が有限だ [ $N(I(X)) < \infty$ ] というのは約束というより、列挙法の必然的な系論である（人は無限の個数のものを現実指定することはできない）。

<sup>77</sup> 「列挙」が重要であって、例えば「全ての実数」のような「規則賦与法」だと、含意の濃度は無限大になり得る。

<sup>78</sup> この場合も、仮定でなく、自然言語の性質から必然的に出てくる系論である。

<sup>79</sup> 筆者はこれを「(自然) 言語の発見作用」(the heuristic function of [natural] language) と呼ぶことにしている。

### V-3 神学と宗教学<sup>80</sup>

#### 注〔V-3〕

<sup>80</sup> 筆者がこの問題を論じる資格はほとんど無いことは承知しているが、門外漢ながら、かなり懐疑を伴った疑問を持っているし、それは許されて良いことだと考える。特に、筆者は、以下で述べるように、信仰を前提としての研究（仮りに「神学」と名付ける——これは、乱暴な言い方だが、「護教論」でなければならない）と、無前提の（無信仰でも、あるいは結論によっては信仰に入ったり、信仰から抜け出たり、全く自由の立場からする）宗教研究（仮りに「宗教学」と名付ける）の間の関係、特にその compatibility についてかなりの懐疑を持っている。このように分ける理由は、信仰という「暗黙」ないし無意識の行為と、研究という意識の行為が両立しないのではないかという（やはり、マイケル・ポラニーの問題意識から発する）疑問によるものである。

そして、以下の乱暴な議論は、その incompatibility の一端が、両種の研究における自然言語の位置づけによって説明されるのではないかという結論に達したので、ここに披露して諸方のご批判をまつものである。

#### V-3-1 名辞「神」の位置づけ

やや唐突ながら、例えば「神」という名辞がある<sup>81</sup>。この名辞をどう位置づけるかという問題をたててみたい。その位置づけの方法は、大きく分けて2つの方向があると、以下では論じたい。そのことを展開するための準備として、これまで述べたことに基づき、さらに幾らか拡張して名辞の性質のある種の系列を考えてみた。

(名辞の系列<sup>82</sup>)

A：固有名詞

B：普通名辞<sup>83</sup>

C：シンボリックな名辞——含意が予め規定されず（規定できず）、含意が湧き出してくるのを享受する

D：準人工（＝準普通）名辞（学術用語）

E：人工名辞——含意が完全に規定されている

これは、何を基準にした分類の系列だろうか？ A→E と移行するに連れて変わるのはどんな性質だろうか？あるいはそもそも、これらは果たして1本の分類軸上に並んでいるのだろうか？ある点で、上記[V-6]の主語による命題の支配に関する分類にも見える——これらの名辞が主語になった場合の命題の支配力についての系列にも見える。

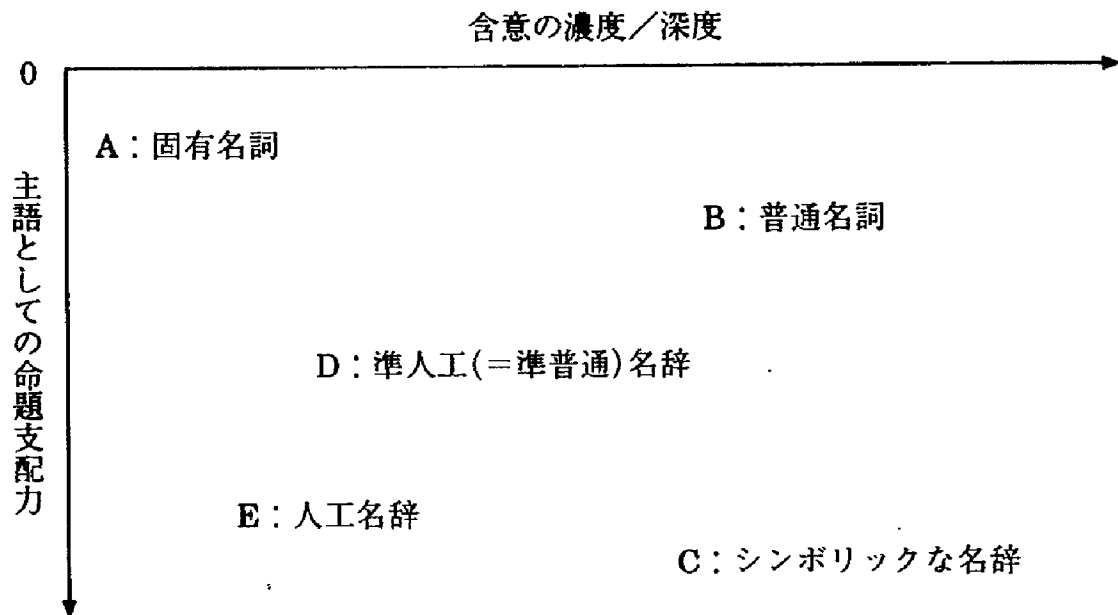
例えば、このうち、固有名詞(A)については上述した[V-6-1]。普通名辞(B)は、本論のメインの考究対象だ。それに対して、それはシンボリックな名辞(C)は特殊なケースであるとも言えるかもしれない<sup>84</sup>。なぜなら、それは、主語としては、命題を相当程度支配するという意味で、普通名辞に似ている。含意が汲み尽くされないという意味でも普通名辞に似ている。だが、その汲み尽くされなさは、どちらかという、含意の濃度というよりは、深度の方に傾くような性質のものであるかもしれない。

しかし、普通名辞(B)が命題を部分的にしか命題を支配しないというのは、それが名辞として含意を持ち過ぎていて、どの含意が統制的か定まらないからだ。

それに対して、シンボリックな名辞(C)も、含意の無尽蔵さについては普通名辞に劣らないどころか、——形としては普通名辞の一種であるとさえ言えることを超えて——もっと含意に富んでいるとさえ言い得る面もあろう。しかし、逆説めくが、シンボリックな名辞(C)は、その含意の無限性にもかかわらず、いな、むしろ含意の無限性のゆえに、命題を完全に支配し得ると言いたい誘惑に駆られるのだ。

だから、上述の名辞の系列は、むしろ別様に眺めたい気もする[図6]。

図6 名辞の系列



図では、系列の分類軸が2次元（命題支配力・含意の濃度/深度）になっている。

自然言語を論じる眼目は普通名辞だ。一般に普通名辞は両極端に別れる。いや、両極端（AとC）の間に分布する。

シンボリックな名辞(C)が一つの極端として、しかも、含意の深度/濃度も、命題支配力も最大のものとしての位置を占めるのは、上記のように、むしろその含意の無尽蔵さのゆえという逆説的な説明であった。すなわち、人工名辞とは異なり、予めその含意の全貌を確定することはできないという点では普通名辞と同じなのだが、後者と異なるのは、そうした無限の含意の総てが、どの命題にとっても、relevantであり、しかも個々の命題はそれら含意だけで完全に支配されるから、ということなのだ。ただし、当然ながら、そうした命題と、そうした含意が予め列挙されているということは有り得ない。普通語彙の場合には、無限の含意の中のあるものがある命題を支配するが、全部が全部をではないし、また、どの含意も完全に命題を支配することは無いのだ。

注〔V-3-1〕

- <sup>81</sup> 「要するにこの神秘を『神が働いている』というように語るなのであって、神という名詞に客観的指示対象があるわけではない」〔八木，上述〕，p. 123。
- <sup>82</sup> これまで再三指摘してきたように（上注41も参照），ここでは名辞の性質は，そうした名辞を組み込んでいる言語の性質をも代表・含意するのだ。
- <sup>83</sup> 「自然名辞」と紛らわしい命名だが，ここでは，上述の系列の中で自然名辞が採る身分ないし範疇の名として用いている。
- <sup>84</sup> 一種の *exercize* として問うのだが，例えば，日本の文化に色濃く存在すると言われる「言霊」という現象〔伊沢，1994〕は，以上のような議論と結びつくだろうか？ そのような言語はどのような名辞からなるのだろうか？ それは，単なる符丁や記号表現などというものでなく，それ自体が存在と不可分なのだから。

### V-3-2 名辞「神」の位置づけ

以上のような整理を施したとき，「神」という名辞は，次のような意義を持つものと位置づけ得るだろう<sup>85</sup>：

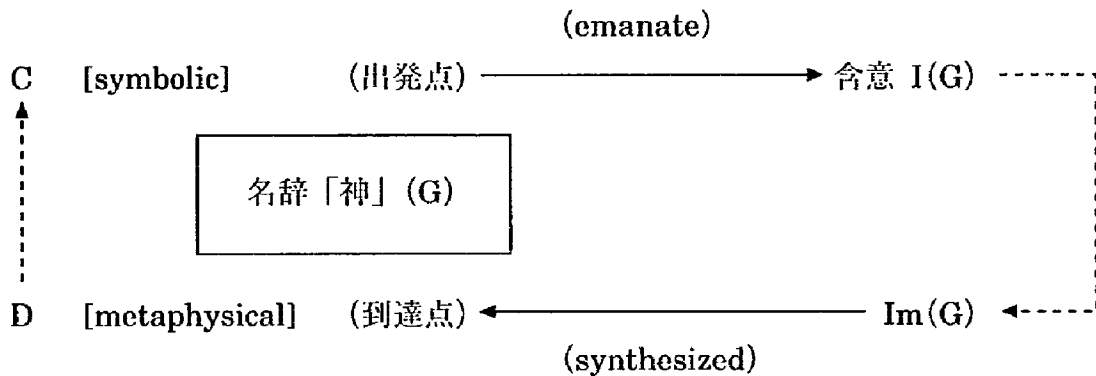
- C：シンボリックな名辞としての「神」——この語の含意がそこから *emanate* する実体〈神〉を現す言葉（上述〔V-2-2〕の「自然名辞賦与法」に当たる）。
- D：準人工名辞（学術用語/形而上学用語）としての神——含意の集大成。  
含意の集合をシンボリックに代表する名辞（上述〔V-2-2〕の「列挙法」に当たる）。

例えば，A. N. ホワイトヘッドの形而上学に出てくる「神」は後者〔D〕の系列に属すると言えまいか？

それをもう少し図式的に表現してみよう〔図7〕。

つまり，シンボリックな扱い（これは「神学」に属する）と，形而上学的＝「宗教学的」扱いでは，名辞「神」(G)がそれぞれ出発点，および到達点にあり，運動の方向はちょうど逆である。これは容易には *reconcile* し得ない

図7 名辞「神」の位置づけ



※  $\text{Im}(G) \in I(G)$  は、後者の中から形而上学的に厳選した含意集合

対立であるように思われるのである。

D としての「神」から C としてのそれへの影響も確かにあるだろう。

注〔V-3-2〕

<sup>85</sup> もちろん、ある意味では、上記 A~E の全部として位置付けられ得るのだが、ここでは最も興味深く、かつ示唆的な 2 ケースに絞って考察するのだ。[八木, 上述], pp. 187-9 も参照。

参考文献

- 伊沢 元彦『穢れと茶碗：日本人は、なぜ軍隊が嫌いなのか』, 祥伝社, 1994.  
 エーコ, ウンベルト『完全言語の探求』, 平凡社, 1995.  
 白井 賢一郎『自然言語の意味論：モンタギューから「状況」への展開』, 産業図書, 1991.  
 ドゥルーズ, ジル/ガタリ, フェリックス『千のプラトー』, 宇野他訳, 河出書房新社, 1994.  
 長尾 史郎「プロセス思考について：周辺の考察」『プロセス思想』, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会, No. 2, 1987.  
 ムーナン, G.『言語学とは何か』, 福井/伊藤/丸山訳, 大修館, 1975.  
 八木 誠一『宗教と言語 宗教の言語』, 日本基督教団出版局, 1995.  
 和辻 哲郎『人間の学としての倫理学』, 岩波書店, 1994 (初版, 1934).

(ながお・しろう 明治大学教授)